

聞き取り調査について

今後望まれる障害者の生涯学習環境について、就業・生活センター8か所、特別支援学校16校に聞き取り調査を実施した。

聞き取り調査実施一覧

	県内就業・生活支援センター	住所	調査日	方法
1	秋田県北障害者就業・生活支援センター	大館市泉町9番19号泉町地域ふくしセンター1階 総合サービスセンター内	令和2年10月6日	訪 問
2	北秋田障害者就業・生活支援センター	北秋田市宮前町9番地67号	令和2年10月9日	ZOOM
3	秋田県能代山本障害者就業・生活支援センター	能代市字長崎42-1	令和2年10月22日	訪 問
4	ウェルビューいずみ障害者就業・生活支援センター	秋田市泉菅野2丁目17-27	令和2年10月9日	ZOOM
5	由利本荘・にかほ圏域障害者就業・生活支援センター E-Supprt	由利本荘市二番堰25番地1 由利本荘地域生活支援センター内	令和2年10月15日	ZOOM
6	秋田県南障害者就業・生活支援センター	大仙市大曲戸巻町2-68	令和2年10月14日	ZOOM
7	ネット横手障害者就業・生活支援センター	横手市梅の木町8-5	令和2年10月21日	訪 問
8	秋田県湯沢雄勝障害者就業・生活支援センター ぱあとなあ	湯沢市字両神15-1	令和2年10月21日	訪 問

	県内特別支援学校	住所	調査日	方法
1	秋田県立比内支援学校	大館市比内町達子字前田野1-2	令和2年10月8日	ZOOM
2	秋田県立比内支援学校 かつの校	鹿角市花輪字案内2	令和2年10月6日	訪 問
3	秋田県立比内支援学校 たかのす校	北秋田市七日市字家向49の内	令和2年10月6日	訪 問
4	秋田県立能代支援学校	能代市真壁地字トメキ沢135	令和2年10月1日	ZOOM
5	秋田県立視覚支援学校	秋田市南ヶ丘一丁目1-1	令和2年10月23日	ZOOM
6	秋田県立聴覚支援学校	秋田市南ヶ丘一丁目1-1	令和2年10月14日	訪 問
7	秋田きらり支援学校	秋田市南ヶ丘一丁目1-1	令和2年10月2日	ZOOM
8	秋田県立栗田支援学校	秋田市新屋栗田町10-10	令和2年10月22日	訪 問
9	秋田県立支援学校 天王みどり学園	湯上市天王字追分西27-18	令和2年10月8日	ZOOM
10	秋田県立ゆり支援学校	由利本荘市水林456-3	令和2年10月9日	ZOOM
11	秋田県立ゆり支援学校 道川分教室	由利本荘市岩城内道川字井戸ノ沢84-40 独立行政法人国立病院機構あきた病院内	令和2年11月19日	電 話 メー ル
12	秋田県立大曲支援学校	大曲市大曲西根字下成沢122	令和2年10月20日	訪 問
13	秋田県立大曲支援学校 せんぼく校	仙北市角館町小館77-2	令和2年10月20日	訪 問
14	秋田県立横手支援学校	横手市赤坂字仁坂105-1	令和2年10月15日	ZOOM
15	秋田県立稲川支援学校	湯沢市駒形町字八面寺下谷地33-2	令和2年10月20日	訪 問
16	秋田大学教育文化学部附属特別支援学校	秋田市保戸野原の町7-75	令和2年10月21日	ZOOM

令和2年10月6日		秋田県北障害者就業・生活支援センター
15:00～15:40		管理者 吉原 正男
取組の概要	(1)取組名	交流会、学習会、就職応援セミナー
	(2)ねらい	障害のある方の交流の場、生活の質・働く意欲の向上
	(3)実施主体	就業・生活支援センター
	(4)対象者	地域の在職者、休職者（登録者471名、未登録だが相談70名）
	(5)実施場所	北部エリア（大館市・鹿角市・小坂町）
2	取組の経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・ハローワーク、相談支援、市の障害者センター、「仲間ネット」（本人同士の団体）と連携し、就職応援セミナー、交流会、学習会を行っている。 ・就労支援機関連絡会議（大館市、鹿角市でそれぞれ2回）の中で、福祉サービスを利用している障害者が一般事業所に就業する可能性について話し合っている。
3	具体的な取組	<ul style="list-style-type: none"> ・在宅での就労者（在職者）について、年4回の交流会と学習会。学習会は市の出前講座を依頼したり、金銭管理をテーマにしたりしている。交流会は「仲間ネット」（本人同士の団体：就労者、休職者）をサポートする形で実施。 ・就業・生活支援センターが主催する就労者対象の就職応援セミナーでは、職場のマナーなどを取り上げている。
4	予算	お金がかからないように工夫している。交流会、学習会の案内は郵送せず、就業・生活支援センター職員が職場などを訪問して届けている。
5	取組の成果	<ul style="list-style-type: none"> ・交流会は「仲間ネット」と共同で実施。仲間ネットには男子1名、女子1名の代表者がおり、「仲間通信」という会報を発行している。通信の郵送をセンター職員が支援し、在職者個々の職場などを訪問する。職場での様子や要望等を知ることができる。 ・交流会、学習会の企画については、当事者が率直に感想を話してくれる。 ・近年高校へのサポートが増えている。手帳取得に対する抵抗感を軽減させる支援、筋ジストロフィーの生徒が就職する際の、職場での支援体制を構築する支援を行った。
6	取組の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・交流会、学習会を広げようとする、マンパワーが必要となる。 ・高校へのサポートに関しては、一旦就職しても、職場の要求水準が高い場合がある。普通高校を卒業時に、トライアル雇用（援護制度。継続雇用が前提の3ヶ月間の試用期間）を利用してもうまくいかない事例がある。
7	今後の展望	今後については市や福祉サービス事業所からの要望もあり、 <u>一般市民への障害者の就労について広く知らしめる場</u> を考えている。
8	障害者の声	<ul style="list-style-type: none"> ・交流会に入りたいという人もいる。話を聞いて欲しい人がいる。話を聞き、時間をかけて支援していく中でやりたい事を見つけ、「面接→実習→雇用」となった例もある。 ・身体の方については、<u>会社が駐車場を固定し、カーポートを設置するなど、理解のある事例</u>もある。

担当：栗田、佐藤、羽川（訪問による実施）

令和2年10月9日		北秋田障害者就業・生活支援センター
13:30～14:30		就業支援員 岩本 幸哉
取組の概要	(1)取組名	チームつながり
	(2)ねらい	障害者の生涯学習および社会参加・地域移行
	(3)実施主体	社会福祉法人 県北報公会
	(4)対象者	北秋田市・上小阿仁村 在住の障害児・者
	(5)実施場所	障害者生活支援センター内、各種イベント会場など圏域全土
2 取組の経緯	平成30年度より、国・県の「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」を法人受託。障害者の社会参加・地域移行の観点から、当センターも事務局の一員として参画している。 <u>以前から民生委員、他の法人職員との関わり</u> があり、行事などでは <u>重度の方の支援</u> にも携わってきた。	
3 具体的な取組	<p>(主にカフェを軸にした活動)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「重心カフェ」を自宅以外にほとんど過ごす場が無い方たちのために実施。緑日風にカフェを行い、本人、保護者の交流の機会が生まれた。 ・保護者の会『チャレンジ!きたっこ』を中心に開催した「冬のおまつり」は北秋田市の施設「コムコム」で実施。障害児・者30名、学生ボランティア22名参加。高校生ボランティアが企画したゲームも実施。 ・「<u>光の会</u>」活動支援(ボランティア)。光の会は当事者の活動。赤い羽根の予算と会費で運営している。障害当事者が様々な企画、報道への取材依頼なども行う。 	
4 予算	事業予算、法人資金、寄付金より支出。割合としては事業予算が大半を占める。	
5 取組の成果	<p>【当事者】 地域資源の活用促進・社会参加の機会の増加につながっている。モデル事業により参加人数、活動回数が増えたことで、<u>障害者と健常者の交流</u>が生まれた。<u>町中で声を掛け合う姿</u>もみられた。地域のイベントでも活動が増え、<u>障害者が自分の活動として取り組める</u>ようになった。</p> <p>【職員】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当事者が地域で暮らすために必要な支援や受け皿としての地域の役割、連携体制など、<u>地域全体の実情と課題の把握</u>に繋がっている。 ・中学生、高校生、福祉大学と連携し、ボランティア育成を行っている。 	
6 取組の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・行政機関および関係機関との連携。モデル事業以前から連携していた市生涯学習課と、イベントのスケジュール調整を行っている。イベントによっては、<u>主催者の意図と参加側の認識のずれ</u>が生まれることもある。 ・コロナ禍における活動の運営、維持。 ・障害のある方の中には、<u>地域の理解</u>などにより、<u>出てこられない人</u>もいる。 ・北秋田市は福祉が一番の産業であるが、<u>担い手が少ない</u>。 	
7 今後の展望	3カ年の事業として実施しているが、今後は事業から「地域全体の取組」へ、そして「 <u>地域の当たり前</u> 」として実践される <u>地域社会の構築</u> のための一歩として発展させていきたい。秋田県生涯学習センターで行っているような障害者スポーツ、防災等の学びの企画も魅力的だと感じている。	
8 障害者の声	<p><当事者(本人)の声></p> <ul style="list-style-type: none"> ・(コロナ禍により)イベントが少なくなって寂しい。 <p><重度心身障害者の保護者の声></p> <ul style="list-style-type: none"> ・<u>生涯学習の活動以前に、気軽に集える場所や機会が少ない</u>。行事や活動に参加する際には設備や機材、サポートの人手も必要になる。 	

担当：栗田 (ZOOMによる実施)

令和2年10月22日		能代山本障害者就業・生活支援センター
13:30～14:30		センター長・主任就業支援員 若松 尚志 生活支援員 小柳 光子、就業支援員 鈴木 瑠衣子
1 取組の概要	(1)取組名	余暇支援・在職者交流会（4回）・ピアサポート
	(2)ねらい	心身のリフレッシュ、居場所づくり、意欲の向上、余暇の有効な活用
	(3)実施主体	秋田県能代山本障害者就業・生活支援センター
	(4)対象者	センター登録者（現在344人）
	(5)実施場所	就業・生活支援センター、県内の施設等
2	取組の経緯	障害者就業・生活支援センターにおける活動の一部であるため実施
3	具体的な取組	<ul style="list-style-type: none"> ・余暇活動について 秋田市（大森山動物園・セリオン）／八峰町（ハタハタ館・さくら園・おらほの館）／市内（音楽療法）等、スポーツ（バレーボール・バドミントン・ボウリング）、カラオケ ・在職者交流会について 「はたらく」マナーと有給休暇／清掃の基本等（清掃関係職の登録者向け） ・能代中央公民館との連携 お菓子作り、リース作り・料理、防災体験講座（炊き出し・テント張り等：日赤短大・及川先生）、衛生グッズ作り（マスク・石鹸） ※<u>公民館主催の行事は、特別支援学校の児童生徒も就業・生活支援センター登録者も参加できる大きなメリットがある。</u> ・お知らせの送付対象者について センターへの登録者のうち、一人一人の状況を職員が判断し、送付している。
4	予算	生活支援事業（県）と雇用安定等事業（労働局）の委託費等からの支出 ※飲食は自己負担。
5	取組の成果	<ul style="list-style-type: none"> ・就労への意欲が向上し、行事を心待ちにしてくれる方が増えた。職員と一緒に活動することでコミュニケーションが図られ、より良い関係性を築くことができる。 ・能代中央公民館と連携して活動することで、双方にメリットが生じた。 ・発達障害のあるシングルマザー同士が情報交換や交流を自主的に行うようになった。 ・<u>面識のない方同士でも、参加を重ねることにつながりが生まれている。</u>（一方では、面識のない方とふれあうのが嫌な方もいる）
6	取組の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者の偏り 自分で余暇の過ごし方をもっている方はあまり参加しない。面識のない方とふれあうのが嫌な方もいる。<u>支援学校の新卒者の参加が少ない。</u> ・新型コロナウイルスの影響。
7	今後の展望	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者の幅を広げるため、内容や参加対象者について工夫。 ・遠出したいもののその機会がない方が多く、リクエストも来ている。また、やりたいことについての希望を出す方もいる。これに対してできるだけ応えていきたい。 ・モデル事業は今年度で3年目だが、延長・継続があることを期待したい。
8	障害者の声	・遠出したい、出かけたいという希望がある。

担当：栗田、佐藤（訪問による実施）

令和2年10月9日		ウェルビューいずみ障害者就業・生活支援センター
15:00～15:40		センター長 牧野 真悟
1 取組の概要	(1) 取組名	①料理教室 ②集い場 ③JST (ジョブ スキル トレーニング)
	(2) ねらい	①単居生活を想定した自炊訓練 ②安心かつ気軽に立ち寄れる拠点としての位置づけ。仲間作りや情報交換の場 ③就業上における対人技能を学ぶ
	(3) 実施主体	ウェルビューいずみ障害者就業・生活支援センター
	(4) 対象者	①～③登録者 (※③は企業就労している発達障害者)
	(5) 実施場所	①東部ガス ②秋田市拠点センターALVE
2	取組の経緯	①単居生活した際の自己管理ができるようになる事を目的に平成18年から東部ガスのキッチンスペースにて実施。当該企画に参加してはじめて包丁を持つ参加者もいた。 ②社会に出ると友人を作る機会が少ない、休日には家にいることが多く過ごし方が単調、といった相談を登録者本人や保護者から受けていた。余暇の効果的な使い方や集まれる場所の必要性から設置。 ③コミュニケーションの苦手意識をもつ発達障害者を対象にして平成30年から委託事業の一環として「スクエア秋田(秋田市中通)」を会場に年6回開催。
3	具体的な取組	①シンプル(単純明快)、シャープ(要点が明確)、ショート(短く)といった3S対応。各工程をできる人(やりたい人)が担当し、最終的に全員でデザートも含めて2～3品を作り、最後は全員で雑談しながら食べ、洗浄～片付け、調理場を掃除して終了。 ②平成18年9月より月1回(第3土曜)サンパル秋田の一室を借りて開催。10時から15時まで出入りは自由。工作、おやつ作り、雑誌を読んだり、雑談など過ごし方は自由。平成19年度からは、サンパル秋田(中央公民館)の共催事業として位置付け。 ③実際に職場で困った事例を当事者から出して貰い、他参加者間で共有。自分の身に置き換えて適切な対応方法を学ぶ機会とした。障害者職業センター職員の研修、ロールプレイなどを取り入れている。
4	予算	生活支援等事業の委託費から計上
5	取組の成果	①包丁や熱源機器が日常生活で利用できるよなったり、レシピを参考に家族のために料理を作ったりという事例あり。調理と食事ができる余暇企画の側面もある。 ②毎回、10数人が参加。ここに来れば誰かに会える、話ができる、という心のよりどころになるとともに、互いに仕事や生活に関する情報交換の場。土曜日にしか支援機関と相談出来ない本人または家族との相談の場や通知書類の内容確認や記載といった支援の場としての機能も持ち合わせている。 ③発達障害者を対象にした集まりの場、ジョブスキルを高めるための場が無かったことから、参加者からは、話せる場面が無かったのがスッキリした。いろいろな助言を得る事ができた、 <u>実際の就業場面で学んだ対応をしてみたらうまくいった…</u> などの声が聞かれた。
6	取組の課題	企画する立場から、①料理教室と②集い場に関しては、同じ様な内容を繰り返しているようにも感じている。
7	今後の展望	②集い場に関して、新しい企画を取り入れながら継続予定。生涯学習センターの障害者スポーツコーナーを利用したボッチャなど、場所を変えた実施も検討する。
8	障害者の声	参加者からは「新鮮味がない」「飽きた」といった感想はなく、「いつも同じ」という安心感を感じているようにも思われる。 重度障害の方のニーズについては、相談は少ない。

担当：栗田 (ZOOMによる実施)

令和2年10月15日		由利本荘・にかほ圏域障害者就業・生活支援センターE-Support
9:30～10:30		生活支援員 朝日 紀予
1 取組の概要	(1)取組名	ふれあいサロン、ピアサポート活動、在職者交流会
	(2)ねらい	登録者同士の情報交換、交流の場を提供する。
	(3)実施主体	E-Support
	(4)対象者	E-Support登録者（約400名）
	(5)実施場所	由利本荘地域生活支援センターや公共施設
2	取組の経緯	外出企画や料理教室の開催など、参加者同士が交流する場を定期的に提供している。
3	具体的な取組	<p>①令和元年5月 ふれあいサロン（懇談会） 参加者11名 ピアサポートの要素がある。自己紹介、お互いへのアドバイスなど。発達障害の方や精神障害の方もいるので工夫し実施している（配置、みんなが話せるように）。</p> <p>②令和元年9月 調理体験（焼きそば作り） 参加者6名</p> <p>③令和元年11月 ドライブツアー（増田まんが美術館） 参加者10名 事業所の車を職員が運転して出かける。</p> <p>④令和元年12月 スマートフォンを安全に使うための講座 参加者11名 市のまちづくり講座担当の方へ外部講師を依頼。</p>
4	予算	障害者就業・生活支援センター事業（生活支援等事業）費より、お茶等の購入。できるだけ予算がかからないよう工夫している。調理体験等の材料費は、参加者負担としている。
5	取組の成果	<ul style="list-style-type: none"> ・毎回、参加者へのアンケートを実施し「参加してよかった」「楽しかった」という感想がある。参加者同士の懇談の場が、互いの状況や悩みを話す場や、共感やアドバイスを 得る機会にもなっていることが伺われる。 ・調理を体験した方は、「自分でもやってみようと思います」と意思表示しており、 趣味の広がりや前向きな気持ちにつながっている。 ・ドライブ外出などの余暇支援を行い、参加者の気分転換を図ることができた。車内 では様々な会話が生まれ交流が図られるが、言い合いになることもある。そうした際 に、自然に仲裁をする方がいるなど、職員も普段とは違った面を知ることができる。
6	取組の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・参加費を抑えた企画の立案や講師の開拓。企画の立案にあたっては、本人たちのア ンケートも参考にしているが、（その講座を）求めているかが分からない場合があ る。 ・新卒の方に来て欲しかった在職者交流会は、ベテランの方の参加が多かった。趣味 の話やキャリアアップの話など、実のある会になったので、特別支援学校卒業時に呼 びかけるなどしていきたい。
7	今後の展望	今後も定期開催を通じて、登録者同士の交流の場を提供したい。ニーズの中には、外出以外にも生活的な自立に役立つ講座、作品作りの希望もある。
8	障害者の声	福祉サービスを利用している方でも、通所（事業所に通い、日中活動や作業を行う）することはできるが、休日になにをしたらよいか分からないなどの声も多い。当センターでの余暇支援の充実を図るだけでなく、生涯学習や行事についても情報提供をしていきたい。

担当：栗田（ZOOMによる実施）

令和2年10月14日		秋田県南障害者就業・生活支援センター
11:00~12:00		センター長 本間 啓之
1 取組の概要	(1)取組名	ほのぼのネット
	(2)ねらい	余暇の過ごし方を提供し（余暇活動）、ストレスの軽減と相談、レクリエーションを行い、仕事（就業）への活力にするため
	(3)実施主体	秋田県南障害者就業・生活支援センター
	(4)対象者	登録者（就職している知的障害者 180名）
	(5)実施場所	様々（年10回開催）
2	取組の経緯	余暇（休日）の過ごし方がわからず、仕事（就業）に影響が出ていることがあった。一方、スポーツを優先してしまい仕事に影響が出ている方もおり、休日、余暇の過ごし方に課題を感じた。また、仕事をしている方同士の交流の場とつながりの場として「ほのぼのネット」を開始した。
3	具体的な取組	①支援学校での相談会：運動会や学校祭にブースを設け、本人、保護者の相談に対応。 ②座談会：食事を取り、お互いの情報交換をしながら、経験したいことなどについても意見を出し合う場となっている。 ③カラオケ、ボウリング、アロマ、フラワーアレンジメント、調理、化粧：外部講師は料理教室の方、化粧品会社の方、個人店の経営者等に依頼。
4	予算	基本は本人負担。施設等を借り上げる際の会場費等はセンター負担。（会場費等）郵送料はセンターで負担。
5	取組の成果	・座談会で集まった方が「（コロナ禍で）仕事が増えて大変」と話した際、他の方の「仕事が減ってしまった」という話を聞き、自分も頑張ろうという気持ちをもつことができた例があった。この取組では在職者のつながりだけでなく、職場でのマナー、振る舞いなどを身に付ける場にもなっている。 ・余暇活動を実施した場所（アロマ体験で行った店）に一人で行き、余暇を楽しむことができた方もいる。 ・職員サイドとしては、就業の場以外の利用者（対象者）の様子を見ることができ、就業場での支援に生かすことができた。
6	取組の課題	・内容によって、参加者のムラがある。（レクリエーションだと参加者は多いが、勉強会になると少ない） ・基本的に土・日で実施するため、シフトの関係上参加できない方もいる。（ほのぼのネットのために仕事を休んでもらいたくない） ・知的障害の方が対象だが、精神障害の方、発達障害の方の登録者が増えてきているので、対象を広げることも検討している。
7	今後の展望	・今年度はコロナ禍で実施できないので、社会情勢に併せて活動を企画する。 ・当事者（登録者）が自ら企画運営できるようサポートしたい。 ・企業、行政、地域を巻き込んだ活動。 座談会に経営者が参加し、ディスカッションをするなど、新しい取組。 ※地域防災については、避難所に自閉症の方が入れるのかなど、心配な面もある。
8	障害者の声	・仲間とのつながりを求めて「ほのぼのネット」に参加する方が多い。 ・障害の重い方については、市の方でニーズを把握しているのではないかと。

担当：栗田(ZOOMによる実施)

令和2年10月21日		ネット横手障害者就業・生活支援センター
10:00~11:00		センター長 齊藤 愛理良
取組の概要	(1)取組名	在職者交流会
	(2)ねらい	仕事を続けるための在職者のリフレッシュとピアサポート、豊かな生活のための公共機関の利用
	(3)実施主体	ネット横手障害者就業・生活支援センター、外部講師（北都銀行等）
	(4)対象者	登録者（在職者）
	(5)実施場所	ネット横手障害者就業・生活支援センター、わいわいプラザ、花火アム、ふるさと村等
2	取組の経緯	平成27年4月から、上記のねらいのもと、 <u>在職者のリフレッシュとピアサポートや公共機関の利用を実施してきた。内容はニーズにより変わってきている。</u>
3	具体的な取組	<ul style="list-style-type: none"> ・社会マナー（公共交通機関の利用） ・健康づくり（バドミントン） ・ピアサポート（仕事、生活について本人同士が話し合う） ・新年会（交流会、カラオケ等）
4	予算	郵送代は支援費より。活動が企画される毎に希望者に郵送している（80名程度）。交通費、食事代、会場費などは参加者が負担。
5	取組の成果	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい地域資源の開拓。尚、開拓は職員が行っている。 ・登録者同士のつながり。<u>もともと仲がよい人たちが一緒に在職者交流会に参加する例もある。</u>
6	取組の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>精神障害者の利用が少ない（交流できる機会を望んでいるが個別対応を望む）。</u> ・企画内容によっては障害別に開催する取組を検討。
7	今後の展望	<ul style="list-style-type: none"> ・登録者のニーズに応じた企画を検討。 ・在職者交流会に参加しない人のニーズ把握。
8	障害者の声	<ul style="list-style-type: none"> ・講座の内容はリクエストにより決めている。 ・<u>※同法人の移行支援事業のOBの方は、自分たちで話し合いを行い、温泉に行く計画を実行することができている。</u>

担当：栗田、佐藤（訪問による実施）

令和2年10月21日		秋田県湯沢雄勝障害者就業・生活支援センター ばあとなあ
13:00～15:00		センター長 後藤 則男
1 取組の概要	(1) 取組名	①余暇支援活動「ふれあいネット・ばあとなあ」(勉強会やスポーツ、文化活動による交流)の実施 ②就労支援フォーラム(障害者の理解と就労支援等)、リハビリ・ピアサポート(ピアサポーターの養成)
	(2) ねらい	①各種余暇支援による障害者同士の交流 ②障害者理解促進と就労支援(障害者差別の解消と、一人一人が人に優しい共生社会の実現のため、積極的に行動するきっかけにして欲しい)
	(3) 実施主体	・秋田県湯沢雄勝障害者就業・生活支援センターばあとなあ、労働局(ハローワーク)、秋田大学、農水省・農福連携担当、湯沢雄勝地域包括支援ネットワーク協議会、障害者職業センター、特別支援学校企業等
	(4) 対象者	・障害者とその保護者、一般市民、障害者団体、企業(事業主)、県及び市町村、保健・福祉・教育・労働等の行政機関並びに団体、就労系福祉施設、障害者就業・生活支援センターの職員等
	(5) 実施場所	・複合施設ばあとなあ、市内ホテル【新型コロナウイルス対策】 ・体育館、カルチャーセンター等
2 取組の経緯	① 年間事業計画の作成にあたり、国から障害者の理解と就労支援に係る啓発活動のほか、働く障害者の余暇支援活動等の実施を指示されていること。 ② 全国の障害者就業・生活支援センターが会員として参加する「全国就業支援ネットワーク」が、毎年実施する研修・研究会のほか、「職業リハビリテーション研究・実践発表会」(主催：高齢・障害・求職者雇用支援機構)、「就労支援NIPPON2020」(主催：日本財団)、「JC-NET会議」(主催：NPO法人ジョブコーチネットワーク会議)、「リハビリ全国フォーラム」(主催：地域精神保健福祉機構)、「農福連携セミナー」(主催：東北農政局)等に参加する中で、各講師の発表や、全国各地の障害者就労支援の実態にふれ、是非、地域にフィードバックし就労支援に対する理解と意識の醸成を促す方策として考える。	
3 具体的な取組	① 余暇支援活動、勉強会 ・スポーツ教室【フライングディスク、ボッチャ、バドミントン、バスケットボール】 ・勉強会【スマホ・安全教室、消費者トラブル、体力テスト、健康保持、お金の使い方、防災フェス、メイクアップ講習、漫画文化とワークショップ、Ipad操作・書道・名刺作り等】 ・交流会等【プロバスケット観戦、横手・稲川支援学校の運動会や学校祭に参加】 ② 就労支援フォーラム、リハビリ・ピアサポート ・H28年度から「就労支援セミナー」を年1回開催、今年度からリハビリ・ピアサポート講座を開催【障害者・保護者・障害者団体、事業主、地方自治体、福祉、教育、労働関係機関や団体等の参加(50人から150人)：県内外から外部講師による講演、パネルディスカッション等】	
4 予算	・国又は県の委託費からの支出の他、法人からの持ち出し。	
5 取組の成果	① 余暇支援活動、勉強会 ・参加者には好評である。【参加者は、10人～20人の範囲で固定されつつある。不参加者は仕事の都合】バスケットボールは、秋田ノーザンハピネッツ(B1に所属)が横手市増田体育館で試合の際に観戦。 ② 就労支援フォーラム、リハビリ・ピアサポート講座 ・地域における就労支援ネットワークの構築がスムーズに行われ、インクルージョン、地域共生社会の実現など、障害者を取り巻く現代的な課題に迫る内容を展開【企業や障害者団体、大学・高校・特別支援学校等の教育機関、県・市町村、国の福祉・労働行政機関や団体並びに福祉施設等との各種情報交換や密接な連携のほか、地域包括支援ネットワーク協議会就労支援部会の一員として、障害者の職業自立や定着促進の向上に貢献。】 ・ピアサポーター養成講座の開設により、増加傾向にある精神・発達系障害者の理解と就労支援を地域に広げる。	
6 取組の課題	・参加者の拡大と、興味を持てるテーマの設定、開催曜日等 <それぞれが、新型コロナ次第になる>	
7 今後の展望	① 「余暇支援活動、勉強会」について、テーマの拡充と参加者の拡大につとめる。 ・余暇支援については、毎月1回の開催が目標【これまでは、年8～10回程度の開催】 ② 「就労支援フォーラム、リハビリ・ピアサポート」については、テーマと内容の充実を図る。 ③ 目標である共生社会の実現を図るため、人材育成が基本であると考えことから、小・中学生に対する「インクルーシブ教育」の実施が不可欠と考えている。 県知事が新たに目指そうとしている差別解消について、基本を学び、相手の立場を理解し、多様性を受け入れられる心の優しい人づくりにもつながることで、障害者支援の理解の広がりも期待している。また、新たな課題でもある発達障害者が増加傾向(高校で300人超え)にあり、障害を受容できる住民が増えることで、多様性を尊重する「きのくに子どもの村学園」の誘致にも期待。	
8 障害者の声	① 余暇支援活動、勉強会 ・具体的にアンケート等は実施していないが、就労中の当事者の場合、参加したいが出勤日と重なり休暇が取れないので、日程を工夫して欲しいという要望がある。 ・毎回、希望は聞いており、コロナ禍の中で希望によりホテルでカラオケ大会を開催。 ・障害の重い方のニーズについては、入所施設担当者の声も参考になる。 ② リハビリとピアサポート講座に参加した当事者から「当事者の参加が少なく残念。もう少し当事者が増えると気が楽になる」とのことだった。(保護者の団体の方の参加はあった)次回(来年3月)開催に向け、病院と連携し当事者の参加に向け配慮する必要性を感じた。	

担当：栗田、佐藤(訪問による実施)

令和2年10月8日		秋田県立比内支援学校
13:30～14:30		進路指導主事 畠山 純
取組の概要	(1)取組名	青年学級
	(2)ねらい	卒業生の交流の場所、親睦を深める（運動、文化的活動を通して）
	(3)実施主体	比内支援学校（進路指導部が計画運営、全職員がローテーション参加）
	(4)対象者	比内支援学校卒業生、保護者、教職員
	(5)実施場所	比内支援学校、北部シルバーエリア
2	取組の経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・同窓生同士の集いの場を設定するため。 ・学校としても最近の仕事の様子を聞いたり、アドバイスをしたりするなど、日々の追指導の情報を得るため。
3	具体的な取組	<ul style="list-style-type: none"> ・活動は年6回。創作活動、学校行事への参加、体育館開放によるバスケットボール、ボッチャなど。 ・年2回卒業生に対して情報提供（1年間のスケジュール等）。HPでの情報提供も行っている。 ・創作活動は学校の授業で行っている水彩、ぬり絵など実態に合わせて行えるよう配慮している。ピアノ教室に通っている卒業生が曲を披露する場も設けている。
4	予算	<ul style="list-style-type: none"> ・年間200円（傷害保険代：1回参加でも6回参加でも同額） ・郵送費は同窓会費（1年1,000円）
5	取組の成果	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業生は、友達や同窓生と会うことで、交流することができる。 ・体育館開放は自分でスポーツを選んで自由に行っている。運動が得意な方だけが集まるわけではないので、様々な方に合わせて運動を楽しめるようにしている。 ・教職員は卒業生の最近の様子を知ることができる。<u>全職員がローテーションで参加しているため、負担感が少ない。</u>
6	取組の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・若い人（卒業してから日が経っていない同窓生）の参加率が低い。集まる卒業生の年齢層に若い人が少ないため、<u>仲間を求めて参加する人が減っているのではないか。</u> ・HPでの情報提供も行っているが、<u>スマホを持っていない、見られる環境がない方もいる。</u> ・毎回同じ内容になりがちであり、目玉の活動が少ない印象がある。内容が大きく変わらないことで、安心して参加できる方もいる。 ・公共の交通機関が便利ではなく、集まれる場所も少ない。
7	今後の展望	<ul style="list-style-type: none"> ・カラオケやボウリングなど、卒業生がこれからの余暇の幅を広げることができるような場所でのレクリエーションの開催。 ・スマホの使い方など、日々の生活で活用できる情報が提供できる講座。
8	障害者の声	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業生の様子として、車を運転して自由に活動する、地域のギター教室に通うなどの例もあるが、<u>一般の方と会う機会も少なく、ニーズを把握できない人もいる。</u> ・障害の重い方に関しては、ショートステイ、福祉事業所の日中活動などを利用してはいる方は充実した生活を送っている印象。 ・学校に来ることが楽しみである。（先生と話がしたいというニーズが多い） ・土日に行うことが少ない。家でじっと過ごすことが多い。そのために、学校に来ることが楽しみである。

担当：栗田（ZOOMによる実施）

令和2年10月6日		秋田県立比内支援学校かづの校
13:00～14:00		進路指導主事 藤田 泰幸
1 取組の概要	(1)取組名	同窓生のつどい（青年学級）
	(2)ねらい	卒業後も同窓生が集まり楽しむ交流の場を設け、同窓生、保護者、学校職員が懇談しながら親睦を深める。
	(3)実施主体	学校：進路指導部
	(4)対象者	卒業生、在校生（卒業後を意識して高等部3年生も可）
	(5)実施場所	学校でやることが多いが、活動によっては校外施設を利用。
2 取組の経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・分校当時から継続（20年ほど） ・年3回開催（運動会、学習発表会、お楽しみ会） ・案内の宛先数60名程度（全卒業生100名のうち）… 同窓会費より支出 	
3 具体的な取組	<ul style="list-style-type: none"> ・同窓会通信：卒業生の近況、つどい、学校行事の様子、今後の予定 ・同窓会総会 ・成人を祝う会：成人を迎える同窓生、保護者、職員で校外施設を利用して ・調理活動：保護者も入り全員でケーキ作り ・映画鑑賞：アニメと洋画部門に分かれてビデオ鑑賞 ・ゲーム：校内で（ポッチャ、将棋、トランプ、ネオホッケー等） ・昼で終了 <p>※今年度はコロナウイルス感染症のため実施できていない。</p> <p><学校側></p> <ul style="list-style-type: none"> ・実施担当は、進路指導部の教員。 ・教職員の参加は任意。<u>全職員一人1回は参加している。</u> 	
4 予算	同窓会会費 3,000円（2年間）	
5 取組の成果	<p><同窓生></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校行事を楽しみにしており同窓会通信を見て参加する同窓生が増えた。 ・卒業した当時の担任や、現在いる先生方に会えるのを楽しみにしている同窓生もいる。 ・調理活動と映画鑑賞をセットで実施したところ好評だった。 ・同窓生と在校生の交流の場となっている。 ・保護者同士の横のつながりができている。 <p><職員></p> <ul style="list-style-type: none"> ・数年前に卒業した面識のない同窓生に会えるのを楽しみに参加している。 	
6 取組の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・近年は参加者が固定化されてきている。 ・同窓生のつどいは土曜日開催が多かったが、仕事の関係で参加できないこともあり日曜日に開催するようにした。 ・同窓会通信を発出するにあたって、<u>郵送料がかさんでいる。</u> ・同窓生が参加し続ける期間は、卒業後およそ5～7年くらいの傾向にある。その後の同窓生の生涯学習活動および動向については把握していない。仕事に取り組んでいるものとみられる。 ・運営においては、学校の教員によるボランティア的側面がみられる。 ・同窓生においては、学校以外で行われる一般講座に生かせるような取組はない。 	
7 今後の展望	<ul style="list-style-type: none"> ・近年は参加者が固定されてきているので、同窓生にアンケートを取り参加しやすいように開催日時や新たな活動を検討したい。 ・本取組の運営は、今後も学校が中心に行っていく予定。<u>保護者や同窓生が主体となることは難しい。（参加する保護者は母親が中心）</u> ・地域の方々の参画は学校行事での来校時には考えられるが、本取組において具体的にボランティアとしての協力を得ることは特に考えていない。 	
8 障害者の声	<ul style="list-style-type: none"> ・同窓生のつどいや学校行事を楽しみにしている。（同窓生） ・卒業しても学校とのつながりがもてる機会があり、ありがたい。（保護者） ・学校以外の催し物にも積極的に参加させたい保護者もいる。（保護者） ・来年も同じような形でやってほしい。（保護者） 	

担当：栗田、佐藤、羽川（訪問による実施）

令和2年10月6日		秋田県立比内支援学校たかのす校
9:30～10:30		進路指導主事 藤本 博明
1 取組の概要	(1)取組名	絆カフェ・ショップ
	(2)ねらい	(1)自分や仲間ができることに気付いて、役割分担したり、助け合ったりしながら協力して活動する。 (2)地域のイベントでの出店を目指して、必要な情報を収集したり、意見を出し合ったりして、カフェ・ショップ出店の一連の活動に取り組む。 (3)カフェ・ショップの運営に関わる実務の取り扱いについて学ぶ。
	(3)実施主体	秋田県立比内支援学校たかのす校高等部(「絆カフェ・ショップ」は、たかのす校単独の取組)
	(4)対象者	秋田県立比内支援学校たかのす校高等部生徒
	(5)実施場所	北秋田市内(主に北秋田地域振興局でのカフェ・ショップの出店)
2 取組の経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・カフェ出店を目指す学習が取組の始まり。作業製品を販売するショップのポスター・装飾作り、製品の在庫管理など、<u>高等部生徒全員が取り組む活動を設定。</u> ・卒業後の継続を願い、令和2年度からは、「<u>ささえカフェ</u>」(北秋田市障害者生活支援センターささえに集う“なかま”が運営するカフェ)と合同での学習を実施。以前から作業製品共同開発などでつながりのある<u>北鷹高校とも連携し、第1回なかま市へと発展した。</u> 	
3 具体的な取組	<ul style="list-style-type: none"> ・地域振興局での定期的な出店。 ・ささえカフェとの連携は、ささえの職員がたかのす校でカフェの研修を実施し、学校がカフェのノウハウを提供。 ・その後障害者の生涯学習モデル事業の連絡協議会の中で「チームつながり」として「<u>ふれあいプラザコムコム</u>」を会場にしたイベントへと発展。<u>北鷹高校、たかのす校の販売、カフェコーナーを共同で運営した。</u> 	
4 予算	作業製品販売の売り上げ、学部運営費を運営予算としている。	
5 取組の成果	<ul style="list-style-type: none"> ・高等部生徒の変容(個別の事例:3年間の変化) 1年時:接客技能、良好な接客態度の意識が向上。(学校での挨拶等が良好になる) 2年時:生徒同士、お互いの良さを認め合ったり、友達の良いところを真似してみようとしたりする。 3年時:後輩に接客技能を教えたり、見本となる接客態度を身に付けたりする。 ・職員の変容 「<u>卒業後の生活への接続</u>」を意識するようになってきており、在学中の取組を卒業後につなげる可能性や、<u>地域のニーズを学習活動に反映させる点</u>について、情報交換を関係機関ともつように努めている。 	
6 取組の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒数の減少傾向と障害の重度・重複化に対応した学習内容・学習活動の設定。 ・卒業後生活介護サービスを希望する生徒が多いため、接客等、カフェ運営が難しい場面が想定される。 ・<u>障害の重い方の学びについては、ささえの職員と共通の課題として認識している。</u> 	
7 今後の展望	<ul style="list-style-type: none"> ・現在の取組を継続しながら、「ささえカフェ」(北秋田市障害者生活支援センターささえに集う“なかま”が運営するカフェ)と合同で商品開発に取り組むなど、<u>活動の幅を広げていく。</u> ・障害者と健常者のかかわりは難しい面もあるが、「<u>集ってみようかな</u>」と感じ、<u>人とのつながりができるような機会を大切にしていきたい。(内陸線の取組など)</u> 	
8 障害者の声	<p>保護者の声:<u>卒業後の「学びの場」が少ない</u> (北秋田市の場合、「学びの場」は多くはないが、生涯学習の場を設定している関係機関は情報発信をしており、在学中から、生徒・保護者へ生涯学習の情報、学習の意義を伝えていきたいと学校でも考えている)</p>	

担当:栗田、佐藤、羽川(訪問による実施)

令和2年10月1日		秋田県立能代支援学校
10:00～11:00		進路指導主事 虻川 由作
1 取組の概要	(1)取組名	文部科学省委託の県事業「障害者の生涯学習支援モデル事業」（能代市中央公民館）との連携による活動
	(2)ねらい	本事業全体のねらいを共有し、地域の特別支援学校という立場から、関係機関との連携による生涯学習支援の理解促進及び活動の充実を図る。
	(3)実施主体	能代市中央公民館、能代支援学校
	(4)対象者	能代山本管内の障害のある方（能代支援学校在校生及び卒業生を含む）
	(5)実施場所	能代市中央公民館 能代支援学校 ほか
2	取組の経緯	令和元年度の関係者会議で能代市中央公民館との連携体制を確認している。本校青年学級との連携や、卒業生名簿等の提供を中心に取組を進めている。 <u>生涯学習の取組に学校が他と連携するのは初めて。</u> 能代市中央公民館の取組に児童生徒が参加することはあった。
3	具体的な取組	令和元年度は2回、同窓会と連携した。 ①午前：きりたんぼ会（同窓会）、午後：スポーツレク（能代市中央公民館） ②午前：同窓会活動、午後：「のしろまち灯り」作品制作 2月に行われた能代市のイベント「のしろまち灯り」では、複数の団体が制作したコロコロドミノ装置を展示する。能代市中央公民館と能代支援学校の作品を隣同士に設置し交流を図った。 能代支援学校では、同窓会活動が盛ん。 <u>会長を選挙で選び、活動内容も自分たちで決める。</u> ミュージカルのボランティアへ積極的に参加する方もいる。
4	予算	本校は協力機関としての参加のため予算等は関与なし。 学校で行う同窓会の活動は、会費から支出している。
5	取組の成果	「のしろまち灯り」への出展では、職員や卒業生、在校生が共に関わることにより、相互で達成感を共有したり、理解し合ったりすることにつながった。また、イベントで本校在校生が能代市の生涯学習の取組を知り、休日の生涯学習講座へ参加することにもつながった。 卒業生からは、「休日の余暇として楽しみ。時間を見つけて顔を出したい。」との話が聞かれた。休日家にいて外出することが少なく、外出するきっかけの一つとなっている。 <u>能代支援学校は「のしろまち灯り」に数年前から参加しているため、中央公民館との合同参加もとてもスムーズだった。</u>
6	取組の課題	本事業に関わる職員の少なさ。県のモデル事業と学校の同窓会を同じと考える職員もいる。担当の職員だけが関わっている。 参加者の固定化、少なさ。事業の周知方法。 <u>卒業後3年間は郵送によるイベント情報を通知している。</u> 今年度はコロナ対策で約300名の卒業生に、学校HPの情報等を郵送で通知した。
7	今後の展望	現在は能代市中央公民館と能代支援学校で、日程と場所を共有している。今後は、共催でイベントを運営することも検討しながら、目標を共有し、事業にあたりたい。本校HP等でも、「障害者の生涯学習支援モデル事業」のパンフレット等を載せる等検討していきたい。 能代山本障害者就業・生活支援センターと連携し、目標を共有したい。
8	障害者の声	<u>SNSトラブル等についての講座を開いてほしいという希望があった。</u> <u>仕事上の悩みを打ち明ける場所にもなってほしいという希望があった。</u> 本人、保護者が <u>どういった情報を必要としているか、知りたい。</u> 車椅子の方も保護者が送迎し参加している。 <u>受け入れのスタッフが不足することがある。</u>

担当：栗田（ZOOMによる実施）

令和2年10月23日		秋田県立視覚支援学校
10:00～11:00		進路指導主事 泉 良昌
1 取組の概要	(1)取組名	①高等部生活情報科（1年課程） ②あいサポート教室
	(2)ねらい	①視覚の障害に応じたQOL（生活の質）の向上を目指し、積極的に社会へ参加することを目指している。②視覚障害のある方に対するQOLの向上と社会自立を目指した生活技能について、一定期間の相談、体験活動を支援する。
	(3)実施主体	視覚支援学校
	(4)対象者	①中途視覚障害者 ②視覚障害のある方（本校に相談に来られた方）
	(5)実施場所	①校内外（街歩き支援など） ②主に校内・敷地内
2	取組の経緯	①②ともに南ヶ丘に移転してから立ち上げた。
3	具体的な取組	①高等部生活情報科 ・中途障害の方が多く（今年度は4名）、 <u>できていたことができなくなる、という段階からスタートする。</u> ・生活再建に向けて、調理、街歩き、創作等の学習を行う。 ・歩行指導は、資格のある専門の職員が行っている。 ②ロービジョン支援センター 生活情報支援班 ・情報・コミュニケーションに関する内容、日常生活動作に関する内容、歩行・移動に関する内容をバランスよく実施。
4	予算	特に無く、物品等を購入した際に必要に応じて徴収するなど（①）。
5	取組の成果	①視力を失って諦めていたことの中にも、いろいろできることがあると分かり、 <u>意欲を取り戻した。</u> ②見えなくてやり方が分からなかったことでも、やれる方法を教えてもらって生活の幅が広がった。
6	取組の課題	・人数自体が少なく、みんなでやる活動がしにくい。 ・歩行指導等を専門的にできる職員が少ない（現在2名）。 ・本人と一緒に活動を体験しないと支援の仕方が分からない。時間が必要。
7	今後の展望	・展示、音声アプリなど、情報の取り方を指導していく。 ・ニーズを吸い上げ、様々な人と関わる機会を増やす。 ・不安を解消し、有効な支援をすくい上げる。そのためにロービジョン支援センターなどできめ細かい支援を行っていく。
8	障害者の声	・生活において、不便が限りなく出てくる。 ・周囲の把握、移動に困難があるだけでなく、情報弱者にもなりやすい。 ・一度行ったことがある、経験がある、ということが自立や指導に大きな意味をもつ。

担当：栗田（ZOOMによる実施）

令和2年10月14日		秋田県立聴覚支援学校
15:00～15:40		進路指導主事 幡宮 明
1 取組の概要	(1)取組名	部活動、教科指導
	(2)ねらい	将来へのつながりを意識した教科指導、部活動指導により、生涯を通じて健康、文化面において生活を豊かにする。
	(3)実施主体	聴覚支援学校職員（聴覚支援部活動担当、地域の中学校・高等学校部活動指導者）
	(4)対象者	中学部・高等部生徒
	(5)実施場所	聴覚支援学校、地域の小学校・中学校・高等学校
2	取組の経緯	聴覚支援学校生徒、卒業生の中には、デフリンピック（聴覚障害者の世界大会）を目指し、実際に出場する方もいる。そうした生徒のニーズに応えるために、部活動に力を入れてきた結果、卒業後の余暇にもつながっている。
3	具体的な取組	部活動：基本的に週5日間。運動部（陸上、卓球）は大会出場に向けて強化練習。 ①陸上部：地域の中学校の練習に参加。陸上競技場の合同練習にも参加。 ②卓球部：地域の高等学校との練習や練習試合。 ③美術部：秋田県高等学校総合美術展（高美展）への出展に向けての取組。 ④部活動以外：寄宿舎での茶道体験、フラワーアレンジメント体験。 交流学習：下北手中学校と体育祭を行い、「一緒にスポーツを楽しもう！協力し合おう！」のテーマのもと、ソフトバレーボール、チームロープジャンプ、ボッチャ、ソフトテニスの種目を体験した。
4	予算	部活動費
5	取組の成果	・第22回夏季デフリンピックブルガリア・ソフィア大会、陸上競技で入賞した日本代表の選手2名（H19卒阿部祐介選手：400m、4×400mリレー6位、H22卒小松彩香選手：400m7位、4×100mリレー6位）。 ・日本ろうあ者卓球協会指定（高等部生徒）など部活動出身者が全国、世界で活躍している。卓球の松本選手は、 <u>地域で卓球を習い、一般の方と一緒に練習を行ってきた。</u> ・秋田県高等学校総合美術展では、 <u>絵画部門、デザイン部門、写真部門で高等部生徒が入賞している。</u>
6	取組の課題	生徒数減少による部員数の不足。 <u>重複障害の方が地域で充実した活動ができる場が少ない。</u>
7	今後の展望	新学習指導要領の実施に伴い、今後も将来の生活を見据えた教科指導を行う。部活動についても同様で、生徒が将来の生活に希望をもてるよう応援する。
8	障害者の声	・「デフコミュニティ」という聴覚障害の方のネットワークがある。そうしたつながりなどから、手話サークルに所属し講師を務める、大学サークルに所属する、フットサルやバスケ、バレーなどのスポーツを楽しむ方もいる。先輩から誘われる例もあるなど、 <u>ネットワークを活用し生活を充実させている方がいる。</u> ・ <u>重複障害の方は、地域ごとの集まりがあっても情報保障の面、コミュニケーションの難しさなどから、孤立する傾向にあるのではないか（本人でなく担当の先生の声）。</u>

担当：栗田、羽川（訪問による実施）

令和2年10月2日		秋田きらり支援学校
10:00~11:00		進路指導主事 近江 美歩
1 取組の概要	(1)取組名	同窓会活動、かがやきの丘まつり
	(2)ねらい	同窓会：会員相互の励ましと親睦の機会とする。母校の教育の発展に寄与する。 かがやきの丘まつり：地域の方との交流を深め、理解啓発を促進する。
	(3)実施主体	同窓会活動：秋田きらり支援学校 かがやきの丘まつり：秋田きらり支援、聴覚支援、視覚支援（エリア3校）で連携
	(4)対象者	同窓会活動：卒業生 かがやきの丘まつり：エリア3校児童生徒、関係事業所、地域の方 等
	(5)実施場所	同窓会活動：秋田きらり支援学校 かがやきの丘まつり：かがやきの丘駐車場等
2 取組の経緯	同窓会：H23から実施。 かがやきの丘まつり：H23からエリア3校合同で目的を共有し実施。	
3 具体的な取組	同窓会：例年役員会、同窓会総会、成人を祝う会を実施。年2回会報を発行。運動会や学習発表会（きらり祭）へは案内を送付。学習発表会（きらり祭）では、ステージ発表だけではなく、福祉サービス事業所の販売もあり、卒業生を含む参加者との関わりがある。 かがやきの丘まつり：町内会との交流がある。イベントコーナーでは地域の団体が参加し音楽等を披露、3校生徒会も企画したクイズ等を行っている。日赤看護大の防災ブースでは、秋田コアビジネスカレッジボランティアとの関わりもあった。	
4 予算	同窓会：年会費は1、000円	
5 取組の成果	同窓会：成人を祝う会は、成人を迎えた卒業生、同窓生、職員、保護者を招き、学校で行う。施設設備面を考慮し、同窓会活動はすべて学校で実施している。学校で開催することで、本人、保護者も安心して参加している。 かがやきの丘まつり：エリア3校と隣接する医療療育センターだけではなく、町内会、福祉サービス事業所など地域に広く宣伝することにより、卒業生も多く参加する行事となっている。日程に縛られずに好きな時間に来て帰ることができたり、知り合いが集ったりすることで、卒業生の保護者も楽しみにして気楽に参加している。	
6 取組の課題	<ul style="list-style-type: none"> 同窓会：駐車場、段差、トイレ、エレベーター等施設設備面で、卒業生が一堂に集まれる会場となると、学校が無難となる。成人を祝う会はホテルなどを会場にすることで、生活経験を増やす機会になると思うが、設備面で課題がある。 保護者が送迎しなければ出かけられない人も多く、集まる際には支援者の数も必要となるため、マンパワーが不足する。 	
7 今後の展望	青年学級として「ポッチャ大会」や「ピン倒し大会」等を企画できないか、進路指導部内で案を検討している段階。 日 程：年1回、同窓会総会・祝う会の後、もしくは別日。 対 象：同窓生、地域の障害をもっている18歳以上の方。	
8 障害者の声	<ul style="list-style-type: none"> 介助が必要なため、一人での外出や支援を依頼しての外出が億劫。もしくは、介助する保護者の負担が大きい。 建物自体のバリアフリー化が不足している。 トイレ設備に不足があり参加しにくい。 個人でポッチャサークルに入る方、プロレス、バスケットボール観戦を楽しむ人もいます。保護者が送迎している例が多い。 卒業時、外出、レクなどの行事がある福祉事業所の利用を望む声もある。 	

担当：栗田（ZOOMによる実施）

令和2年10月22日		秋田県立栗田支援学校
9:00~9:40		進路指導主事 渋谷 真二
1 取組の概要	(1)取組名	①同窓会活動：卒業生のつどい、成人を祝う会、レクレーション ②エンジョイクラブ（試行）
	(2)ねらい	①情報交換や近況報告をしながら、卒業生同士の絆を深める。 ②生涯スポーツの需要を知る（事務局、学校）。仲間と一緒にスポーツを楽しむ。体を動かす喜び（参加者）。
	(3)実施主体	①栗田支援学校（進路指導部、他職員任意） ②栗田支援学校（特別活動部、特体連事務局：寄宿舎職員含む）
	(4)対象者	①、②共に栗田支援学校卒業生
	(5)実施場所	①、②共に栗田支援学校
2	取組の経緯	①卒業生が集まれる場、職員は状況を知る場として実施。 ②来年度の新組織設立に向け、生涯スポーツの需要を栗田支援学校卒業生を対象に調査。
3	具体的な取組	①同窓会活動 4月 卒業生の集い（近況報告、カラオケ等レクレーション） 8月 同窓会総会・成人を祝う会 10月・11月 レクレーション（カラオケ、ボッチャ、綱引きなど） 2月 秋田県綱引選手権に参加（在校生1チーム、卒業生1チームで出場） ②エンジョイクラブ 10月 バasketボール実施
4	予算	①同窓会費や学校後援会費より支出：卒業後3年以内の方に郵送。 ②今年度は予算化されていない。
5	取組の成果	①コロナ禍で成人を祝う会のみ実施。対象を成人の方に絞った。参加者からは、祝う会に参加することができてよかった、という声が聞かれた。 例年であれば、市内のホールで実施。100名近い参加者がいる。 ②Basketボール参加者は、卒業後運動する機会が少なく、楽しんでいる様子がみられた。
6	取組の課題	①例年土曜日に開催している。勤務等の関係で参加できる人とできない人がいる。情報の周知については、 <u>機器を持っている人、扱える人は対応できるが、すべての人には届かない可能性がある。</u> スマートフォン等の操作、情報モラルに関しては、生徒指導部が昼休みを利用して指導している。
7	今後の展望	①、②共に日曜日の開催。参加人数を増やしたい。
8	障害者の声	①今年度はコロナ禍により会自体が延期、縮小等で参加できない卒業生がいる。仲間、恩師に会う機会が少なく、寂しいという声があがっている。 ② <u>今後もスポーツを行う機会があればよい。</u>

担当：栗田、佐藤（訪問による実施）

令和2年10月8日		秋田県立支援学校天王みどり学園
15:30～16:30		進路指導主事 渋谷 純一
1 取組の概要	(1)取組名	わくわくサークル（青年学級）
	(2)ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・地域に住む障害のある青年たちの生涯学習の場を保障し、精神的な支えの場、学習及び文化的活動の場としての役割を果たす。 ・公共施設を利用した活動を通し、障害者の生涯学習に対する地域への理解啓発を図る。 ・諸活動を通し、障害者の余暇の充実と活性化を図る。
	(3)実施主体	天王みどり学園（進路指導部、地域支援部、希望職員）
	(4)対象者	本校卒業生及び地域の障害のある方
	(5)実施場所	本校及び地域の施設等
2 取組の経緯	平成18年11月に第一回青年学級が開催。その後回数や内容を変更し実施している。	
3 具体的な取組	<p>①夏祭り出店：駄菓子屋の出店。 ②バーベキュー：天王グリーンランド。<u>地域の障害のある方も参加。</u> ③タブレット教室：学校開催 ④ボウリング：地域のボウリング場</p> <p>卒業生への<u>個別の郵送の他、市役所、福祉事業所等にポスターを掲示し周知している。</u> 今年度はコロナ禍でレクリエーションを校内で2回実施（1回目終了、ボッチャ、ピン倒しボール。2回目1月実施予定）。</p>	
4 予算	参加者負担を基本とし、運営に関わる費用（通信費）等は学校後援会費より支出	
5 取組の成果	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業生は活動を楽しみにしている。世代を超えた関わりが生まれる。 ・職員は卒業生との自然な関わりができ、事業所の担当者等との交流ができる。また、悩みを聞くなどフォローアップの場になり、離職対策につながったこともある。 	
6 取組の課題	<p>参加者がほぼ固定している。青年学級の内容がニーズを反映させているか、地域への広がりには十分かといった点。<u>地域において気兼ねなく出られる場とのマッチング、本人と、保護者のリーダーをどのように保証していくのか。</u> 通信費の削減方法。紙媒体の方が安心する卒業生もいるのではないかとといった配慮により、卒業生全員に郵送し情報提供している。</p>	
7 今後の展望	<p>学校だけの運営でなく、福祉事業所で実施する余暇活動とのコラボ、高校生ボランティアの活用などを視野に入りたい。 <u>選挙を取り上げた講座など、時代のニーズに合わせた内容を企画したい。</u></p>	
8 障害者の声	<p>直接本人から新たな活動を希望する声は出ていないが、今年度のように活動の変更があると「〇〇のお知らせが来ていない」、「△△は今年ないのか」など問い合わせがくることもある。保護者は子どもが地域に出られる機会を楽しみにしている。 障害の重い方は学校で行う成人を祝う会には頑張って参加する。<u>地域行事への参加については、ゆだねられる安心感、本人の意思などを考えると、保護者の負担が大きいのではないかと。</u></p>	

担当：栗田（ZOOMによる実施）

令和2年10月9日		秋田県立ゆり支援学校
10:00～10:40		進路指導主事 三浦 智己
1 取組の概要	(1)取組名	秋田県立ゆり支援学校同窓会
	(2)ねらい	同窓生同士の関わりや学校との絆を大切に深める。
	(3)実施主体	ゆり支援学校（進路指導部、参加希望職員）
	(4)対象者	ゆり支援（養護）学校中学部・高等部卒業生
	(5)実施場所	ゆり支援学校、地域のホテル
2	取組の経緯	ゆり養護学校2年目となる平成14年発足。毎年7月に同窓会総会や成人を祝う会を行うとともに、レクリエーションを行っている。同窓会は、開校初年度の卒業生が20歳を迎えることを期に発足した。その他、5月の運動会で同窓生参加の競技、10・11月の学校祭で集いの場を用意している。
3	具体的な取組	運動会：卒業生約40人参加。卒業生の参加種目を設ける他、ダンスで在校生、職員と関わる時間も設けている。 学校祭：一般参加者として卒業生約70人（同行者含む）参加。在校生の発表を参観したり、在校生が授業で作成した作業製品販売を購入したりしている。 同窓会総会：成人を祝う会と兼ねて地域のホテルで実施。会食やレクリエーションを通じ、仲間や職員との情報交換の場になっている。 参考：令和元年の参加者数同窓生49人、保護者17人、賛助会員7人、現職員31人の計104人。近年の参加者数に大きな変動はない。
4	予算	参加希望者から年500円の会費を集めている。会費を納めた方に、はがきや会報を送付している（年3回）。その他、同窓会総会や成人を祝う会で撮影した集合写真も送付している。
5	取組の成果	・卒業生の近況報告を受け、状況に応じて追指導につなげられている。仲間に会えることを喜ぶ卒業生の様子が見られる。 ・同級生に限らず、 <u>異年齢の卒業生と互いに交流を楽しんでいる</u> 。
6	取組の課題	・卒業後2年位は参加人数が多いが、成人を祝う会を終えると、参加する卒業生が減少し、参加する会員はだいたい決まっている。 ・ <u>障害の重い卒業生においては、継続した参加が難しい</u> 。特に担任した教師が異動することによって、参加を控える様子がある。
7	今後の展望	本校開催の同窓会は、現在の実施方法で定着している。一昨年度から由利本荘市成人式への参加を呼びかけるなど、地域開催の行事へ参加を呼びかけており、成人式参加における由利本荘市生涯学習課との連携も定着しつつある。今後も、生涯学習課からの呼びかけ等により、地域で行われる生涯学習や行事への参加につなげられるよう、「チームゆり支援」の輪を広げられるようにしていきたい。
8	障害者の声	地域の生涯学習も含め、様々なことに関する情報が不足しているため、情報を取得しやすい環境を整えて欲しい。 インターネット環境が無い方もいる。知っている人がいる、誘ってくれる人がいるといった、 <u>ネットワークの必要性</u> を感じている。

担当：栗田（ZOOMによる実施）

令和2年11月19日		秋田県立ゆり支援学校 道川分教室
16:30～16:50		教諭 小松 百子
1 取組の概要	(1)取組名	卒業生支援
	(2)ねらい	独立行政法人国立病院機構あきた病院に入院している道川分教室高等部卒業生が、 <u>卒業時まで身に付けた経験や生活リズムを病棟での生活スケジュールの中で発揮し、スムーズに卒業後の生活に移行できるように支援する。</u>
	(3)実施主体	ゆり支援学校道川分教室職員 「保健・指導部」 中心に全職員で実施。
	(4)対象者	前年度高等部卒業生
	(5)実施場所	あきた病院内及び敷地内
2 取組の経緯	在学中は週14から16時間の教育活動を行っているが、卒業と同時に学校生活の部分がなくなり、 <u>医療が中心の病棟生活に戻る</u> こととなる。環境の変化が大きいことから、できるだけ段階的に病棟生活に移行できるようにしたいと考え、始まった。	
3 具体的な取組	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業生支援の実施に当たっては、高等部3年次に保護者から卒業生支援の参加希望や支援内容の要望を聞き取り、個別移行支援計画に反映させる。<u>それを基に保健・指導部が作成した卒業生支援年間実施計画書を主治医に提示し、本人の体調等から参加の可否や個別の配慮事項に関する指示を受けている。</u> ・4月に全職員で支援対象者の実態や配慮事項を確認し、支援を開始する。 ・支援期間は、卒業後の1年間、1回20分、年間20回程度を計画している。 ・内容は読み聞かせや歌、卒業生が集まってのゲーム、病院敷地内の散策など。 ・5年ほど前までは卒業生の担任や高等部所属の職員で運営していたが、現在は、分教室の全職員がローテーションで支援に当たっている。 ・1年間のまとめとして、活動の様子をピックアップして記載した「活動報告書」を個別に作成し、保護者と病院の関係部署に配付している。 	
4 予算	予算はない（予算を必要とする活動はしていない）。	
5 取組の成果	<ul style="list-style-type: none"> ・同級生と会ったり、活動を楽しんだりして「快の表情」がたくさん見られる。 ・実施に当たっての希望調査では、<u>保護者からの要望が高く、すべての卒業生が支援を受け、事後には保護者から喜びや感謝の言葉をいただいている。</u> ・病棟との連携が欠かせない取組であるが、<u>卒業生支援を重ねてきたことで病棟での認識が深まり、円滑な移行支援となっている。</u>卒業後は、他の入院患者と同様に病院の療育活動に参加する（担当は各病棟の保育士）。 	
6 取組の課題	今年度においては、新型コロナウイルス感染防止のため、学校職員は自分が担任している児童生徒が所属する病棟以外に入ることが制限されている。したがって、卒業生が所属する病棟に配属になっている職員だけで支援に当たっている。たくさんの職員と関わってほしいという願いの下、全職員での支援を計画していたが難しい状況にあり、特定の教師としか関わることができない。	
7 今後の展望	令和4年度に閉室を控えているが、それまでは実施する。	
8 障害者の声	<u>本人は回答が難しいが、笑顔で活動に参加したり同級生や職員との関わりを楽しんだりする様子が見られる。卒業後、学校の時間が全くなくなることに不安を抱く保護者も多く、来院した折に活動の様子を伝えると、喜びの言葉をいただくことが多い。</u>	

担当：栗田（電話、メールによる実施）

令和2年10月20日		秋田県立大曲支援学校
10:30~11:30		進路指導主事 北林 拓也
1 取組の概要	(1)取組名	「ふれあいハッピースクール」
	(2)ねらい	卒業生を中心とした障害のある方が安定した社会生活・地域生活を送ることができるように、余暇の活動の充実を図る。
	(3)実施主体	大曲支援学校進路指導部
	(4)対象者	大曲支援学校卒業生
	(5)実施場所	大曲支援学校
2	取組の経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・少なくとも5年以上前から行われていた。講師もこの5年間は変わっていない。 ・案内については、卒業後10年間は卒業時に徴収した同窓会費から郵券代を出している。11年目以降は、同窓会費を継続して納入すれば、郵送による連絡を行っている。
3	具体的な取組	<ul style="list-style-type: none"> ・茶道、フライングディスク、グラウンドゴルフの3講座から1つを選択して受講する。 ・通常は年3回（6・8・9月）の実施としているが、今年度はコロナウイルス感染拡大防止のため2回の計画（8・9月）としていた。しかし、1回目は直前に大仙市で感染者が出て中止とした。2回目は悪天候のため中止とした。 ・例年は卒業生35名程度が参加している。（大曲支援学校卒業生は約30年で550名） ・<u>地域の方等が講師として協力している。</u>（茶道：地域住民、フライングディスク：フライングディスク協会から派遣、グラウンド・ゴルフ：地域の同好会参加者）
4	予算	1回300円の受講料を徴収している。
5	取組の成果	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者は、卒業生と会うことを楽しみにしており、毎年参加している人が多い。 ・リピーターは多い。 ・グラウンド・ゴルフは、全3回の開催のうち1回は、大曲支援学校主催の「秋山台カップ」（地域の方も参加するグラウンド・ゴルフの大会）と同時開催・参加するようにしている。<u>地域住民も多く参加している。</u>
6	取組の課題	<p>卒業生の、大曲支援学校での生涯学習に関する情報の入手手段・・・学校からの通知が主。友人間の情報のやりとりはある。</p> <p><u>→学校からの通知以外に「情報を取りに行く」方法がないか。</u></p>
7	今後の展望	<u>同窓生が主体となって運営できるようになってほしい。</u> 現在は学校での開催となっているので、地域に出での活動を企画できるとよい。
8	障害者の声	「こういうスポーツをやりたい」という意見はあるかもしれないが、担当のところまでは上がってきていない。

担当：進藤、菊地、栗田（訪問による実施）

令和2年10月20日		秋田県立大曲支援学校せんぼく校
13:30~14:30		進路指導主事 佐藤 豪
1 取組の概要	(1)取組名	①「子ども演劇体験講座（高等部宿泊学習）」②「せんぼく桜スクール（ヨガ教室）」③「せんぼく桜スクール（グラウンドゴルフ大会）」 ※B、Cは青年学級
	(2)ねらい	①・周りの人とコミュニケーションを図る力を伸ばす。 ・自己の気持ちや感情を表現する技能を高める。 ②・地域の公民館講座の参加に興味をもつ。 ③・同窓生同士の親睦を深める。
	(3)実施主体	① 大曲支援学校せんぼく校、 <u>仙北市教育委員会生涯学習課</u> ② 大曲支援学校せんぼく校同窓会、 <u>仙北市教育委員会生涯学習課</u> ③ 大曲支援学校せんぼく校同窓会
	(4)対象者	① 大曲支援学校せんぼく校高等部1・2年生徒 ② 大曲支援学校せんぼく校同窓生 ③ 大曲支援学校せんぼく校同窓生
	(5)実施場所	① わらび座 劇団員練習用小劇場 ② 大曲支援学校せんぼく校体育館 ③ 大曲支援学校せんぼく校グラウンド
2 取組の経緯	・せんぼく桜スクール（青年学級）を地域と連携した形で実施したいと考え、昨年度から仙北市教育委員会生涯学習課と連携して計画を進めてきた。角館、西木、田沢湖にある公民館講座に新規で加える形で行うこととした。	
3 具体的な取組	※仙北市教育委員会生涯学習課と連携した取組（①、②）のみ記載 ①・あきた芸術村わらび座の劇団員の方々の協力を得て、高等部の宿泊学習における体験学習として計画した。自分で考えた好きな言葉をつなぎ合わせ、みんなで一つの劇を作り上げた。 ②・当初は仙北市に住むすべての障害のある方（せんぼく校同窓生含む）を対象として、ブルーベリー狩りや制作活動を公民館講座に組み入れて計画していたが、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、中止となった。その後、生涯学習課と協議し、田沢湖公民館の講座として、せんぼく校同窓生のみを対象としたヨガ教室を9月に延期して開催することになった。	
4 予算	・仙北市教育委員会生涯学習課と連携して進めているため、 <u>講師依頼料等の経費は生涯学習課で負担している。</u>	
5 取組の成果	①・事前に劇団員の方々とやりとりをしていたこともあり、当日はすぐに打ち解け、お互いに笑顔で交流することができた。生徒たちも普段の生活では発しないような声量で気持ちを表現する場面が多く見られた。また、終了後にはわらび座取締役劇場事業本部長より、「今後も新たな形で学習活動に関わらせてほしい」との申し出があった。 ②・開催当日は、同窓生18名中、12名が参加するなど、初の開催に興味をもって参加する同窓生が多かった。講師も障害のある方へのヨガ教室に興味を抱いてくださり、参加者の言葉の理解の程度や身体面の注意点等について、詳しく知っていただくことができた。	
6 取組の課題	・新型コロナウイルス感染症の影響で、毎回の開催には慎重な判断を強いられている。当初の計画であった、仙北市のすべての障害者の方を対象とした公民館講座については、不特定多数の方が集まってしまうことから、次年度も開催は難しいと思われる。	
7 今後の展望	・地域の公民館や観光施設等を会場にするなど、徐々に地域に移行する機会を作っていく。また、仙北市に在住する障害者を対象とした公民館講座として開設してもらえるよう、仙北市教育委員会生涯学習課と連携して進めていく。	
8 障害者の声	・同窓生については、生涯学習そのものに対する関心よりも、旧友や教師に会いに来る感覚で参加している印象が強い。本人や保護者からの要望は今のところ特にない。	

担当：菊地、進藤、栗田（訪問による実施）

令和2年10月15日		秋田県立横手支援学校
14:00~15:00		進路指導主事 朝倉 知司
取組の概要	(1)取組名	同窓会、アンテナショップ
	(2)ねらい	同窓会：親睦を深める。余暇支援の充実。イベントを通じた学び合いの場を創出。 アンテナショップ：地域への理解啓発、作業製品の質の向上、達成感を味わう場。
	(3)実施主体	同窓会：同窓会（事務局は学校）、進路指導部、希望する職員、PTA アンテナショップ：中学部、高等部
	(4)対象者	同窓会：同窓生（約300人：昭和54年開校） アンテナショップ：中学部生、高等部生
	(5)実施場所	同窓会：学校、地域の施設（公民館など） アンテナショップ：地域の店舗3か所
2	取組の経緯	同窓会：開校当初から実施。 アンテナショップ：地元企業と連携した作業製品の開発、地域の伝統野菜、十文字和紙など作業学習の取組の一環で実施。
3	具体的な取組	同窓会 ・年6回実施（今年度は成人を祝う会1回）。 ・例年は運動会、学校祭、スポーツレク、吹奏楽、鍋っこ等を実施。 ・スポーツレクはフットサル、ボッチャ（外部講師：ボランティア）。 ・吹奏楽は横手清陵学院高校、鍋っこはPTA（親父の会）が実施するなど、学校職員以外も実施。 アンテナショップ ・生徒が納品し、地域の方と接しながら運営している。
4	予算	同窓会費は卒業時に1,000円。現在は約100名に年3回郵送。支える会（在校生並びに卒業生の社会的自立を援助、教育の振興・充実を図ることを目的に発足した会）からも支出。
5	取組の成果	同窓会 ・就職している卒業生が、 <u>楽しみにして仕事を頑張っている</u> という声を聞く。 ・成人を祝う会に出席した保護者からは、 <u>喜びの声が聞かれる。地元の成人式と2回出席する方もいる。</u> ・職員に関しては、 <u>卒業生の近況を知るだけでなく、共通の話題での会話を楽しむなど、社会人として接している様子が見られる。</u> アンテナショップ ・ <u>生徒が製品の説明を求められたり、店の方と自然なやりとりが生まれたり</u> する中で達成感を得ている。
6	取組の課題	同窓会 ・スポーツレクは「 <u>またやりたい</u> 」という感想もある中、 <u>個人でやるにはどうしたら良いか、などの相談もある。</u> ・内容、メンバーが固定化されている。若い人の参加が成人を祝う会が過ぎると減る。
7	今後の展望	同窓会 ・障害者就業・生活支援センターと合同でできることがあれば。 ・高等部3年生から社会へのつなぎの部分を工夫する。
8	障害者の声	同窓会 ・参加した方は楽しめている。 ・学校の担当としては、 <u>お金をかけずに楽しめる方法を卒業生が身に付けることができるように、無料の講師、地域のボランティアを活用した実践をしていきたい。</u>

担当：栗田（ZOOMによる実施）

令和2年10月21日		秋田県立稲川支援学校
15:30～17:00		進路指導主事 佐藤 貴子
1 取組の概要	(1)取組名	青年学級 in TABIJI
	(2)ねらい	・地域の生涯学習支援スペースの利用をとおして自分の興味関心のある事柄について学んだり、ライフステージの各段階で必要な知識を得たりして、生涯にわたって学び続けることができるようにする。(卒業生) ・地域の生涯学習支援スペースの利用体験をとおして、生涯学習について知り、卒業後にスムーズに利用ができるようにする。(高等部3年生徒)
	(3)実施主体	トータルサポートスクール リード学舎
	(4)対象者	卒業生(卒業して5年以内)、高等部3年生
	(5)実施場所	トータルサポートスクール リード学舎、その他公共施設
2 取組の経緯	秋田県障害者の生涯学習支援モデル事業委託「YUZAWAアダプタサポートTABIJI」の開始を機に、 <u>従来の青年学級の課題</u> となっていた事項の改善を目指して、青年学級の共催を始めた。 <u>※従来の青年学級の課題</u> ・多様なニーズにこたえられる内容の設定…一般就労の方々が楽しめるような内容となると、参加している方々のニーズと合わないことが考えられる。 ・参加者の固定化…一般就労した方々は欠席の傾向にある。 ・ライフステージの各段階に応じた学びの機会…一般就労の方々がこれに近い方々を対象にすることを考え、TABIJIに頼った。	
3 具体的な取組	○令和元年度 〈第1回〉「iPadを体験しよう①」写真加工アプリを活用した写真のコラージュとフレームの装飾、塗り絵アプリ 〈第2回〉「iPadを体験しよう②」美文字判定アプリ体験、名刺づくり、クッキーデコレーション ○令和2年度 〈第1回〉12月実施予定。「スポーツを楽しもう！」e-スポーツ、ボッチャ ※12月13日実施。	
4 予算	卒業生への郵送料はリード学舎が支出。(発送準備は、学校) ※お知らせを希望する案内対象の卒業生は約70名。	
5 取組の成果	・卒業生やその家族からは、居住地域の生涯学習について知ることができた、今後も利用したいとの感想が聞かれた。 ・職員からは、 <u>生涯学習について考える機会になった</u> との感想が聞かれた。 ・卒業後5年以内の卒業生に、青年学級の内容についてのアンケートを実施した。カラオケ、スポーツの希望が多かった。青年学級でこれまで行われてきたものを希望する傾向があった。 ・就労継続支援B型を利用している方から得られた反応がよかった。	
6 取組の課題	・内容によって、想定した人数に満たなかったり、人数を制限したりすることがあった。 ・コロナ禍で延期になった活動の再開を知るタイミングが遅くなり、連携不足を感じた。 ・一般就労の方々は、余暇においては自分たちで集まって楽しんでいる模様。そのため、学校に来る必要性がないようにみられる。	
7 今後の展望	・地域の生涯学習支援について周知し、利用を促したい。昨年度は参加人数に上限を設けた。今年度は会場を別に設定することで、学校主催の青年学級と同様、幅広く参加を呼びかけたいと考えている。 ・ <u>高等部3年生に参加を呼び掛けている。</u> 参加は任意のため、今年度は青年学級実施日とは別に学校の学習活動として見学や体験の機会を設定し、 <u>卒業後のスムーズな利用につなげたい</u> と考えている。	
8 障害者の声	・TABIJIの活動が土曜日のため、仕事で行くことができない方もいる。 ・本人が一人で行くことができず、保護者の都合が合わないと参加できない。	

担当：佐藤、栗田（訪問による実施）

令和2年10月15日	秋田大学教育文化学部附属特別支援学校	
13:00～14:00	進路指導主事 黒木 良介	
1 取組の概要	(1)取組名	【研究】「児童生徒の『生涯学習力』を高める教育課程の編成」 ・夏のセミナー（8月実施 オンライン）・公開研究会（1月実施予定）
	(2)ねらい	【小】表現活動を通して、豊かな情操を養う。 【中】作業学習を通して自己理解を深め、意欲、態度を育てる。 【高】生涯学習力の基盤（知識や技能、問題解決、生涯にわたって自ら学びに向かう意欲や態度）を養う。
	(3)実施主体	学校、PTA、生涯学習課、生涯学習センター
	(4)対象者	本校児童生徒
	(5)実施場所	学校、公共施設、遊興施設
2 取組の経緯	「『生涯学習力』を高める教育課程の編成」研究の2年目（2年次計画）。「はたらく」「くらす」「たのしむ」の視点から、小学部、中学部、高等部それぞれ、 <u>生涯学習力</u> を高める授業づくりを通して、 <u>教育課程の編成</u> を研究。 ※例：高等部：「問題発見」→「問題解決」といった思考力や学び方を身に付けることで、 <u>生涯にわたって学び続ける生徒の育成につながるのではないかと</u> して「Dスタディ」という授業を設定。	
3 具体的な取組	【小】表現活動を通して、豊かな情操を養う。 【中】作業学習：紙工班はローソンと連携し、コーヒー豆のにおいとり袋を作成。 【高】Dスタディ：自分たちで目的地までの行き方を調べ、公共施設等を利用。 【PTA】チャレンジデー：県内の遊興施設を利用したり、人材を活用。 ※今年度は実施していない。 【研究】セミナーをオンラインで実施し、生涯学習についての知見等を公開。	
4 予算	主に各学部の学年費やPTA会費、研究関係は学校の予算から。 大学のモデル講座は本人負担ありの予定（一日保険等）。	
5 取組の成果	【職員】 ・ <u>図画工作研究授業において大学教授、NPO法人代表、生涯学習奨励員と連携し実施。</u> ・ <u>現在行っている学習活動が、生涯学習と密接につながっていることを学習活動の設定や発言から見て取れる。</u> ・ <u>研究を通して、様々な公共施設を利用するだけではなく、生涯にわたって学ぼうとする意欲や考え方を学ぶ基盤を育てようとしている。</u> 【児童生徒】 ・例：高等部の生徒はDスタディにおいてプランニング能力の向上、テイクアウトの予約経験で自信を得るなど、 <u>体験を通じた学びによる自信。</u>	
6 取組の課題	・学問的な学びに興味をもつ児童生徒への対応を含め「 <u>学びの質</u> 」を高めたり、学べる場所の情報の提供。 ・ <u>コロナ禍での体験機会の不足（地域や社会教育施設とのつながりが重要だと研究を通して職員が理解した）。</u> ・ <u>一人でどこかに出掛けたり、家庭でICT機器を活用したりすることは難しいことが予想される。</u> ・ <u>重度の障害のある方の学ぶ意欲への対応が可能なのか。</u>	
7 今後の展望	在学中に生涯学習への意識、生涯学習を行う力を高めることができるように、 <u>教育課程を編成しようとしている。</u> 生涯学習を考えるに当たり、「はたらく」「くらす」「たのしむ」の視点は欠かすことのできないものであると捉え、3つのワーキンググループによる研究を推進している。今後は、時間割の組み替え、年間指導計画・授業時数などの検討、学部間の話合い、授業で使えるコンテンツ作りなどを行う予定である。	
8 障害者の声	【職員の声】 ・在学中の仲間や先生たちに会いたい卒業生が多い。 ・ <u>地域資源の活用（図書館、美術館、博物館、生涯学習センターなど）、地域人材の活用（畑作り、染色、縫製、クラフトテープ籠作り）。</u> ・ <u>生涯学習につながる様々な経験ができる学習環境を小学部段階からつくる。</u> ・ <u>地域とのつながりを授業の中に取り入れる（交流、スポーツクラブ等の公共施設の利用、生涯学習奨励員の活用）。</u>	

担当：栗田（ZOOMによる実施）

ここからは、県内全ての特別支援学校高等部在籍生徒及び卒業生（卒業後3年以内）の保護者を対象に実施した「障害者の生涯学習」に関するニーズ調査（アンケート）、県内の就業・生活支援センター（8か所）、特別支援学校（16校）に対し実施した「今後望まれる障害者の生涯学習環境について」の聞き取り調査の結果に加えて、それを受けて当センターで実施した各種研修や生涯学習講座等の取組を通して見えてきた障害者を取り巻く生涯学習の状況や今後取り組むべき課題について考察していく。

まず、「障害者の生涯学習」に関するニーズ調査から見えてきた本県の特徴は、全国と比較して、生涯学習の機会が必要だと認識している人や学びたいという意欲をもつ人の割合は高いが、生涯学習を継続している人の割合が低いことである。つまり、生涯学習の必要性の認識と実際の行動にずれが見られるのである。この要因として、一つは生涯学習に関する情報の不足、二つ目は学ぶ場やプログラムの不足、三つ目は共に学ぶ仲間の不足が挙げられ、これが本県が抱える課題の一端と言える。

これらについて、聞き取り調査から、各所では様々な学びの機会が構築されているが、その情報は郵送等の個別の対応で提供されていることが多く、この状況が学ぶ仲間の不足にもつながっていることが見えてきた。生涯学習に関する情報を得る方法が限られ、必要な情報が障害者の元に届いていない現状が浮き彫りになったのである。併せて、予算や人的な支援の不足により、学ぶ場やプログラムの充実を図ることが難しいという問題も明らかになった。

学習の内容や形態については、余暇や健康維持等に関するものが多く、テレビやインターネット利用等による自宅学習が全国よりもかなり低い割合となっていた。このことから、現状では同行援護や移動支援等の充実を図り、物理的バリアの解消に努めることが不可欠である。残念だったのは、公民館や生涯学習センターなどの公的な機関における講座や教室での学びが最も低い割合だったことである。社会教育に携わる機関としては重く受け止めなければならない結果が示された。今後は、公的な機関として障害者の生涯学習支援にしっかりと取り組み、現状を改善する努力を続けなければならない。

情報については、その不足が指摘され、全ての方に届く仕組みが望まれている。そして、その実現が学習の機会や仲間の不足という課題の解決にもつながると思われる。今後は全県域の関係情報を一元的に提供できるシステム構築、そのための自治体、関係機関、学校等間の連携が喫緊の課題となる。

これらの取組が進むために、前提として次のような取組の必要性も見えてきた。

一つは、特別支援学校と卒業後の生活の場となる地域（事業所、公的機関等）との連携である。特別支援学校においては、地域とのつながりを授業に取り入れ、生涯学習につながる様々な体験ができる学習環境を整えること。地域は、卒業後安心して学べる場となることが肝要である。

今一つは、障害のある方、ない方の枠を越えたネットワークの構築であり、共に学ぶ場の創出である。当センターでは、これらの調査結果を元に、県の生涯学習・社会教育の中核機関として、市町村や関係機関、民間企業と連携しながら、共生社会の実現に向けたいくつかのアプローチに着手してきた。一つ目は、障害者理解と共に学ぶ学習機会の構築について、体験を通して学ぶ内容の市町村関係職員専門研修を実施し、各市町村における学習機会の創出を促進しようとしたことである。実際、この研修に参加した市町村職員が「障害者の生涯学習」に関する事務事業を企画し、実施に向けて奮闘している例がある。二つ目は、共に学ぶ場の創出である。センター内に障害者スポーツスペースを設け、障害者スポーツを通して障害の有無にとらわれない交流機会を実現しようとした。これらの取組により、障害者の生涯学習に対する認識が高まり、課題解決の一助になるものと考えたからである。三つ目は、共生社会の実現を目指す取組を民間と協働して行うという試みである。アンケートや聞き取りを通して、障害者の生涯学習を推進するためには行政、民間を問わず目標を共有し、互いの強みを生かして課題解決に取り組むことの必要性がクローズアップされてきた。そこで、志を一にする企業（10社）と連携して障害者スポーツ交流大会を企画、実施した。今後、このような取組がコンソーシアムに発展し、官民協働による学びの機会が創出されることが期待される。

この研究を通して、共生社会の実現には包摂的な生涯学習の展開が不可欠であることがわかってきた。しかし、その実現には多くの偏見や無関心が障壁になっている。今後は、幼少期からのインクルーシブ教育の必要性も視野に入れ、共生社会を目指す事業が県内各所で展開されることが期待されるとともに、本研究がその一助となることを願うものである。



講座

研修

調査研究

市町村職員専門研修① 実施レポート

実施日：令和2年9月9日（水）10時～16時 会場：県生涯学習センター及び周辺 参加者：29名

行政職員の知識や技術の向上を図るため、「市町村職員専門研修」を実施しました。1回目は「障害者の生涯学習支援～障害者の視点で街を見よう～」がテーマです。

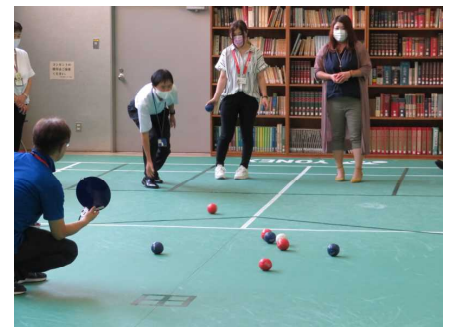
【講義】

当センターの栗田 寿社会教育主事補が、『障害者の生涯学習』に対するニーズ調査から見えることと題して、また柏木 睦主任社会教育主事が、『障害者の生涯学習』講座の企画のために」と題して、それぞれ講義を行いました。前者の講義では、障害のある方の生活状況を学び、「ニーズ調査」の結果の数値の意味を考えた後、「障害者の生涯学習を進めていく上での課題について考えました。

後者の講義では、昨年度から始まった当センターでの「障害者の生涯学習」への取組について説明がありました。当センターが「調査・研究」「研修・人材育成」「学習活動推進・情報発信」の3つの機能を持っていることを活かし、「障害者の生涯学習」の中で取り組みやすい分野として「障害者スポーツ」を選択したこと、その後「障害者と防災」へと取組を拡大したことなどの説明がありました。

【体験活動】障害者スポーツ体験！～ポッチャに挑戦～

講義終了後、パラリンピックの正式競技として採用されている「ポッチャ」を体験することになりました。「ポッチャ」は1～3人以内の2チームが対戦します。バドミントンコートとほぼ同じ大きさのコートに、最初にジャックボールと呼ばれる白球を投げます。このジャックボールに向け、両チームが赤球・青球をそれぞれ投げ合い、双方がすべての赤球・青球を投げ終わった後、よりジャックボールに近い球のチームが得点を得る競技で、この研修では参加者を6チームに分け、リーグ戦で勝敗を争いました。



優勝チームには、秋田大学附属特別支援学校の生徒が作業学習で作ったお皿などの製品が贈られました。

【ワークショップ】車椅子の視点で街歩きをしてみよう！ in 山王

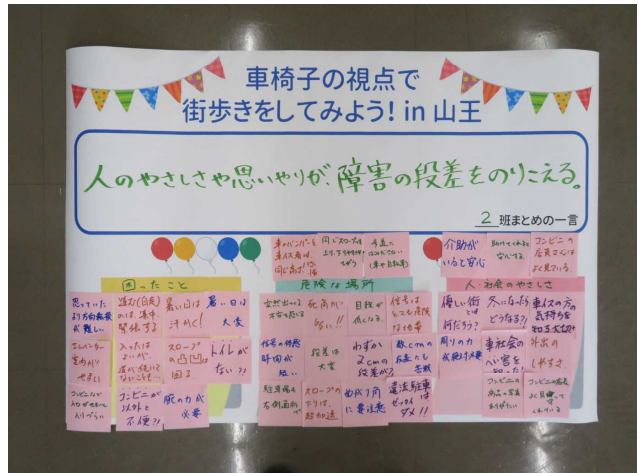
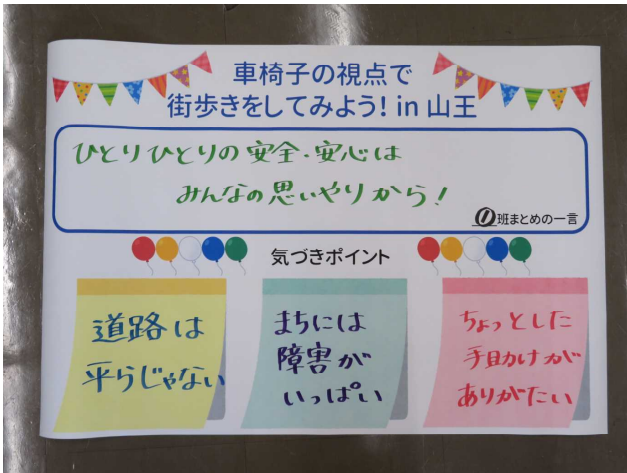
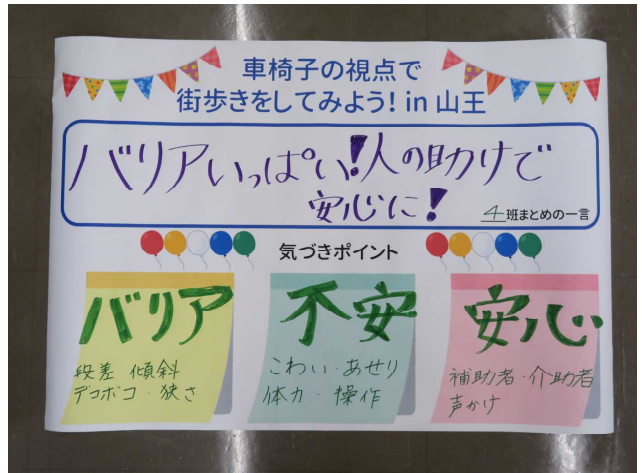
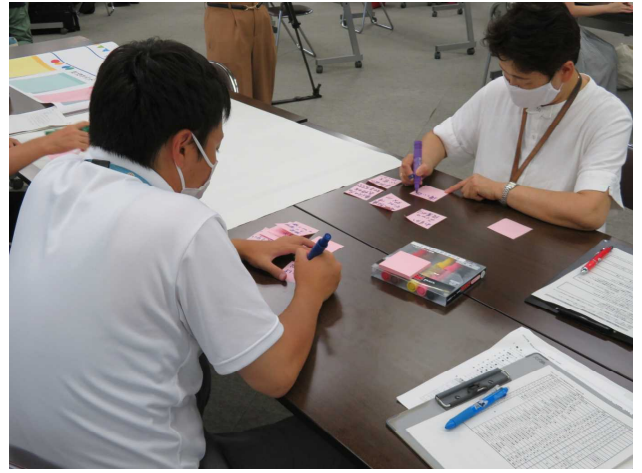
午後は、4班に分かれて「車椅子での街歩き体験」を行いました。各班には「ビンゴミッション」カードが配付され、『全員1回車椅子で1分以上自走する』『車椅子でお店に入って買い物をする』などのミッションをクリアしながら、車椅子での街歩きを体験することとなりました。実際に車椅子で街歩きをしてみると、「2cm程度の段差を乗り越えるのも危険」「側溝の蓋の溝に車輪がハマって動けない」「スロープは上るのも降りるのも大変」など、それまで想像したことのない困難さが街中にあふれていることを体験することができました。

街歩き終了後、各班に分かれ、街歩きを通して気付いたことを話し合いました。それをまとめ、発表を行い、理解を深めて研修は終了しました。



【参加者の声】（抜粋）

- ・車椅子の大変さ、バリアの障害を身をもって感じる事ができた。実際に感じる事の重要さが理解できた。
- ・普段の業務では経験できない内容であった。行政として何が出来るか、するべきかを考えるきっかけとなった。
- ・県内の実態や企画の実際、体験も交えてとても濃い内容でした。障がいの有無に関係なく「誰でも参加できる」「誰でも行ける」ことを意識して、仕事に取り組みたいと思った。



市町村職員専門研修②(兼)公民館等職員専門研修② 実施レポート

実施日：令和2年10月7日(水) 10時～16時 会場：県生涯学習センター 参加者：35名

行政職員や公民館等職員の知識や技術の向上を図るため、「市町村職員専門研修(兼)公民館等職員専門研修」を実施しました。合同開催となった今回の研修のテーマは、『障害者の生涯学習×公民館の防災』です。

【講義】「避難所設営体験」・「障害者の視点による街歩き」実施報告

当センターの進藤 尊信社会教育主事が、公民館等職員専門研修①で実施した「避難所設営体験」と、市町村職員専門研修①で実施した「障害者の視点による街歩き」の概略を説明しました。今回の研修は市町村職員専門研修と公民館等職員専門研修とを兼ねており、午後の講義・演習・熟議で「障害者の生涯学習×公民館の防災」について学び、議論を行う際のレディネスを揃えることを目的として行われました。

【講義】障害者の生涯学習×公民館の防災

午後は最初に、日本赤十字秋田短期大学講師の及川 真一先生が、「なぜ『障害者の生涯学習×公民館の防災』が必要なのか」のタイトルで講義を行いました。及川先生は、『被災者』として一括されやすいが、性別、性別自認、年齢、障害の有無、国籍や母語の違い、家族構成や就労状況によって必要とされる支援が異なること、避難所の運営には段階的かつ確実に「質の向上」を目指さなければならないことなどを、自身の被災体験や他地域での被災者支援等の具体的な経験を交えてお話してくださいました。また、防災に関わる手話・指文字や多様性、「公平」と「平等」の違いなど、障害者と防災に関するトピックスについても教えてくださいました。



指文字を勉強中

【演習】本格手洗い

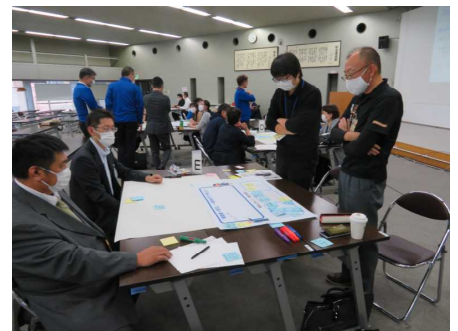
続いて、及川 真一先生の指導のもと、「すべての基本 感染防止・本格手洗いのススメ」のテーマで、手洗いの重要性を学びました。手洗いチェッカーとブラックライトを利用し、どのように手洗いを行えば手の汚れを落とすことができるのかを実体験しました。手洗いチェッカーを手に塗ったあと、及川先生の「いつものやり方で手を洗ってきてください」との指示を受け、参加者は手を洗いました。しかしブラックライトで照らすと手洗いチェッカーは全く取り除けておらず、皆大変驚きました。この手に付着していたものが新型コロナウイルスだったとしたら、知らないうちに感染し、感染を拡げている可能性がある…実感をもって知ることができました。



いつものやり方では汚れが落ちない…

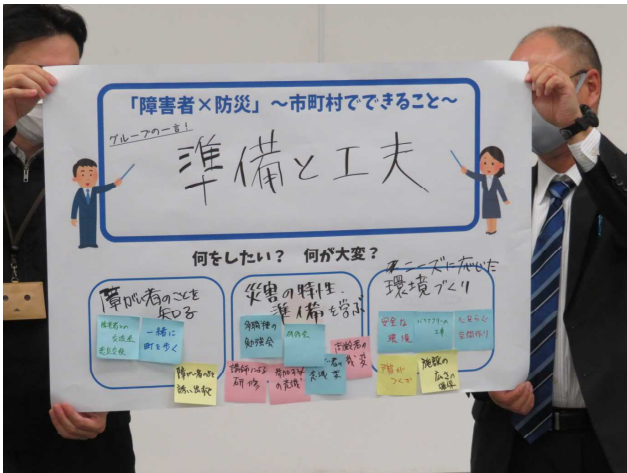
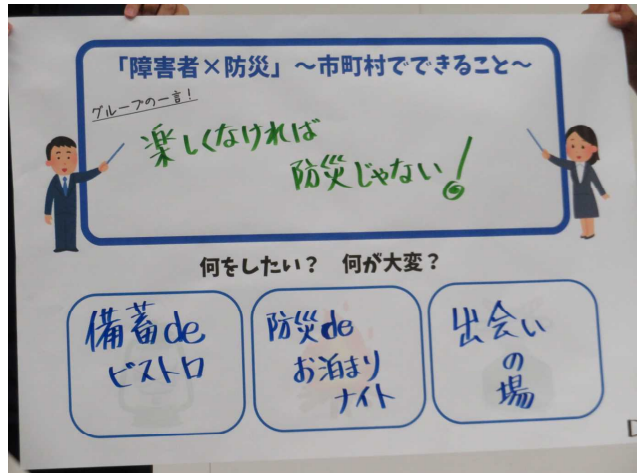
【熟議】障害者×防災

最後に、及川 真一先生と当センターの柏木 睦主任社会教育主事による、『障害者×防災』～市町村でできること～をテーマとした熟議が行われました。話し合いの中で、「障害者のニーズに応じた環境づくり」の必要性や、「市町村対抗手洗いオリンピック」、「福祉施設・学校との合同避難訓練」の実施、「備蓄deビストロ」(期限切れが近くなった備蓄食材を利用した料理コンテスト)や「防災deお泊まりナイト」など、障害者と防災とを結びつける、市町村が取り組んで行けそうな様々な意見が出されました。



【参加者の声】(抜粋)

- ・発想の転換：マイナスイメージ濃い「避難」を「楽しいサバイバル」に置き換えられる。一般住民にも普及させたい。事業としてプログラムしたい。
- ・資料での障害者防災は知っていたつもりだが、現実に災害が起こったら…ということを知ることができた。
- ・車いすの利用、ビデオ視聴をして、障害理解ができた参加者が多い研修と思いました。参加者が勤務地に戻り、障害者の方々へ自分が何ができるか考える機会になればよいと思います。





調查研究

講 座

研 修

楽しみながら『防災』を考えよう！～障害のある方のための防災スキル～

第1回 「いのちを自分で守る～自助～」 ～身近にできる防災対策～

日時：令和2年7月25日（土） 10時～11時30分
会場：秋田県生涯学習センター 3階 講堂 参加者：14名

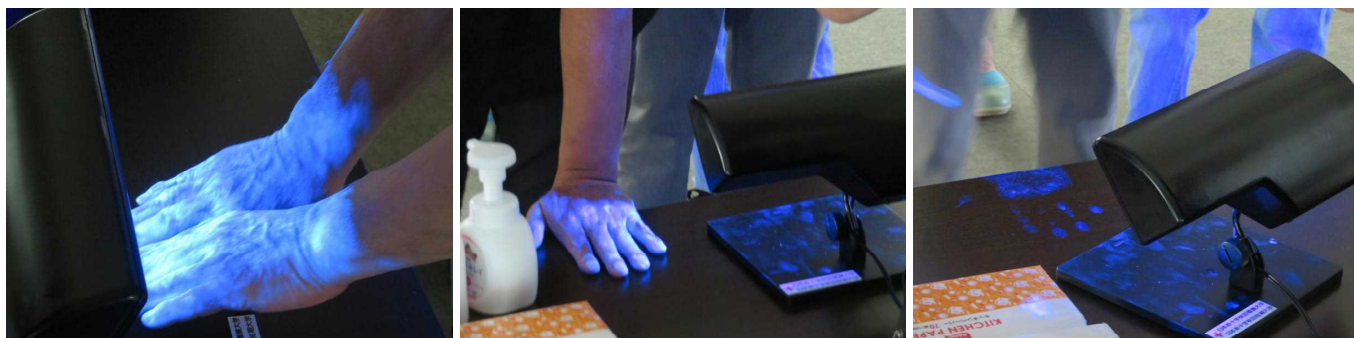
この講座は、障害のある方が楽しみながら『防災』を考え、日常生活や災害時に役立つスキルを身に付けることができる4回シリーズの講座です。講師は、日本赤十字秋田短期大学の及川真一氏です。1回目は、「自助」について学びました。

【防災を学ぶ×楽しい】

「防災はこわいもの、暗いもの」という印象をもつ人も多いですが、講師の及川先生は、「楽しく学べる防災教育」に取り組んでいます。災害の記憶は時間が経つにつれ薄れていきます。防災を日常にするためには、防災を学ぶことを「難しさ」から「楽しさ」に変換することが大切であり、この講座ではそのスキルを学んでいくことを確認しました。

【チェックしてみよう！自分の手洗い】

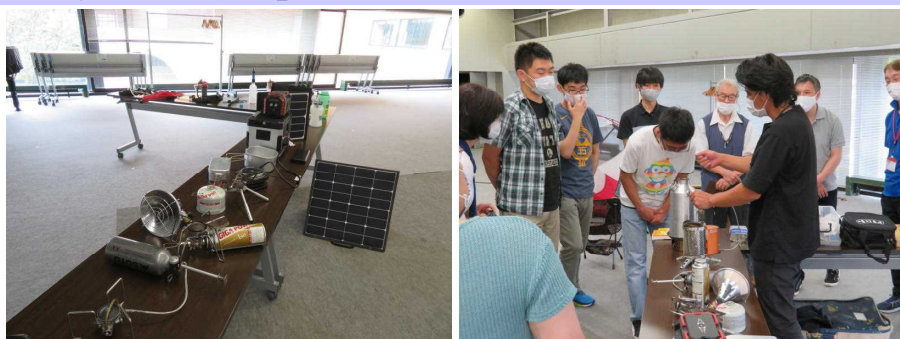
防災を学ぶ究極の目的は「自分の命は自分で守る」ということです。それは、このコロナが流行している今こそ大事なことです。そこで、まずは、自分の手洗いをチェックしてみました。ブラックライトに反応する塗料をコロナウイルスに見立て、普段の手洗いでどのくらい落ちていたかを見てみました。結果は、洗っていないのでは…と思うくらい落ちていませんでした。テーブルの上やドアノブ、顔や鼻など、触ったところに塗料が付いているのを見て、普段は気付かないけれども、実際はウイルスが付着しているかもしれないことをみんなが納得しました。及川先生に正しい手洗いの仕方、アルコール消毒の仕方を教えてもらい、塗料が見えなくなるまで頑張ってお手洗いをしました。



<落ちてない！服にもついている！ 食事の前の手洗いの大切さを痛感した手洗いの演習>

【防災を日常に！キャンプグッズを見てみよう！】

防災を日常にするためには、キャンプの経験が有効になります。キャンプは、電気がなかったり、家がなかったりするところではかたに快適に過ごすかを考えます。キャンプグッズがあれば、災害時にも役に立ちます。及川先生が使っている道具を見せてもらいました。ソーラーパネルや充電器、浄水器、初めて見る様々な道具に、みんな興味津々でした。



<どうやって使うの？どこに売っているの？たくさんの質問が出ました>

【参加者の声】（抜粋）

- ・すごく楽しかったです。楽しんで毎日やっていく事の大切さが分かってよかったです。
- ・防災のことをもっと知りたいです。
- ・実体験大事だ！

楽しみながら『防災』を考えよう！～障害のある方のための防災スキル～

第2回 「東日本大震災・熊本地震から学ぶ～共助・共同～」 ～避難所の実態と課題～

日時：令和2年8月22日（土） 10時～11時30分
会場：秋田県生涯学習センター 3階 講堂 参加者：13名

この講座は、障害のある方が楽しみながら『防災』を考え、日常生活や災害時に役立つスキルを身に付けることができる4回シリーズの講座です。講師は、日本赤十字秋田短期大学の及川真一氏です。2回目は、「共助・共同」について学びました。

【あなたは どうしますか？】

気温が低い日に、バス停で防寒具がない子どもが寒そうにしていたら、という実験動画を見ました。自分が寒い思いをしていると、なかなか他の人に服を貸すことはできません。見て見ぬふりをする人、励ます人、自分が寒い思いをしても服を貸す人などさまざまでした。

もし避難所で携帯電話の充電が少なくなって困っている人を見たらどうするでしょうか。自分の携帯電話の充電が不十分であれば、なかなか助けることができません。困った人を助けてあげましょうとはよく聞く言葉ですが、「共助・共同」は「自助」の力が高まっていないと機能しません。障害の有無にかかわらず、自分ができることや知識をしっかりと増やしていく「自助」の大切さを参加者は感じていました。



<自分ならどうするかな…？>

【A4クリアファイルでフェイスシールドを作ってみよう！】

コロナ禍でフェイスシールドが必要な場面が増えましたが、持っている人は少ないかと思えます。そこで、身近なA4クリアファイルを使って作ってみました。

災害が起こってから、あれを準備しておけばよかったということはよくありますが、「ないからできない」ではなく、「あるもので何とかできないか」に発想を転換させることが大切であることを体感しました。



<思ったより簡単にできた～！>

【語り合うことも防災 3がつ11にちをふりかえる】

東日本大震災が発生した3月11日、何をしていたかをグループに分かれて語り合いました。一度語り出すとなかなか止まらず、各自がそれぞれの場所でいろいろなことを感じていたことがよく分かりました。日常を過ごす中で、非日常体験は忘れがちになりますが、時々語り合うことで、その時のことを鮮明に思い出すことができます。「あの時は…」とちょっと話すだけでも防災になるので、家族や友人、職場の人たちなど、いろいろな人と語り合ってほしいと思います。

その後、及川氏から東日本大震災や熊本地震の様子を写真で見せてもらいました。普段の備え「自助」がいかに大切であるかを考えさせられました。参加者からは「水をストックしなくなったな。今日、買って帰ろう」という声も聞かれました。



【参加者の声】（抜粋）

- ・フェイスシールドの作り方が分かった。
- ・テレビなどでは知ることができない情報を知ることができました。
- ・実体験をもとにしたお話なので、とても分かりやすく共感できます。

楽しみながら『防災』を考えよう！～障害のある方のための防災スキル～

第3回 「新たな防災教育～アウトドアと防災～」

～防災を学んで楽しい～

日時：令和2年9月19日（土） 10時～11時30分
会場：秋田県生涯学習センター 3階 講堂 参加者：10名

この講座は、障害のある方が楽しみながら『防災』を考え、日常生活や災害時に役立つスキルを身に付けることができる4回シリーズの講座です。講師は、日本赤十字秋田短期大学の及川真一氏です。3回目は、「アウトドアと防災」について楽しく学びました。

【防災でふわとろオムライス？】

いつ起こるか分からない自然災害。電気やガスなどが急に使えなくなってしまった時に役立つのがアウトドア用品と野外活動の経験です。非日常をどのように乗り切るかが防災、非日常をどれだけ楽しむのかがキャンプなので、実は防災とキャンプは相性がいいんです。テントを張る、電気やガスがない状態でご飯を作るなどのアウトドアの経験は、災害時にも役立ちます。

今日、チャレンジするのは「ふわとろオムライス」。防災講座らしからぬメニューやインスタ映えしそうな材料に驚いていましたが、みんな楽しく準備を始めました。



【メスティンでほったらかし炊飯、でも風が…】

今回炊飯に使用したのが、アルミ飯ごうの「メスティン」です。メスティンはアルミなので熱伝導率が高く、固形燃料などの比較的弱い熱源でも簡単に調理することができます。固形燃料は大体20分程度燃えるので、通常であれば火をつけてほったらかしにしておくと炊き上がるのですが、この日は風が強く、なかなかメスティンに火があたりず苦戦しました。風のあたりにくい場所や近くにある風をさえぎる物を探すなど、風が強いからできないではなく、風が強い中でどうするかをみんなが考えました。



<固形燃料に火をつけて、消えるまで待てばいいのですが、この日は風が強く、いろいろな工夫が必要でした>

【おいしく出来た！楽しい！】

ご飯が炊けたら卵を加え、新聞紙でくるんで10分間蒸らしました。ドキドキしながら蓋を開けましたが、無事にふわとろオムライスが完成していました。簡単に短時間でこれだけの食事が作れることに驚いていました。

ご飯を食べながら、「メスティンや固形燃料をどうやったら入手できますか？」「メスティンの他のレシピは？」など、たくさんの質問が出ました。「防災は怖いもの、暗いもの」という認識をもつ人も多いのですが、この講座を通して参加者は「防災を学んで楽しい」と感じたようでした。



【参加者の声】（抜粋）

- ・すごく楽しかったです！おいしいオムライスできました！
- ・本当に楽しい講座でした。風のある中での非常食作りは勉強になりました。
- ・体験することで生きることに目標がもて、未来が見えてきます。

楽しみながら『防災』を考えよう！～障害のある方のための防災スキル～

第4回 「みんなで避難所を設置しよう！」 ～短時間でプライベート空間を確保する～

日時：令和2年10月24日（土） 10時～11時30分
会場：秋田県生涯学習センター 3階 講堂 参加者：25名

この講座は、障害のある方が楽しみながら『防災』を考え、日常生活や災害時に役立つスキルを身に付けることができる4回シリーズの講座です。講師は、日本赤十字秋田短期大学の及川真一氏です。最後となる4回目は、これまで身に付けたスキルを活用し、障害のない方と一緒に避難所の設置をしました。

【お湯だけで50人分のご飯を炊き出し】

最初に体験したのが、避難所での炊き出しです。今回は、お湯や水を注ぐだけで50人分のご飯ができるアルファ化米を使いました。

箱の中に大きなしゃもじ、取り分け用の容器、ふりかけ等が全てセットとして入っていることにみんな驚いていました。

今回はお湯を使ったので、15分で50人分のご飯が完成しました。



【障害のある方もない方も一緒に協力してテントを設営】

次にテントを設営しました。ドーム型テントを使えば、短時間でプライベート空間を確保することができます。テント設営は初めてという人も多かったのですが、5分ほどで全員完成させることができました。

テントを使うことにより、仕切りがしっかりできること、視線が遮られるのでリラックスできることなどの効果があります。

さらに、簡易ベットを組み立ててテントの中に入れました。地面からの冷気を防いだり、地面から距離があることでウィルスなどの感染症を防いだりする効果があります。プライベート空間をしっかりと確保することは、コロナウイルス対策でも有効です。これだけのことが短時間でできる上、避難所全体のレイアウトを考えながらの移動も簡単ということもあり、自分でもテントとベットはあってもいいと話す人がたくさんいました。



【自分にできることって何だろう】

最後に、「災害が起きた！その時に自分ができることは」のテーマで話しました。この講座を通し、まずは自分ができることを増やす「自助」の大切さを感じている参加者が多く、「～を準備しておきたい」「～したい」などの前向きな意見が聞かれました。

普段から自分に何ができて何はできないかを知り、できることを増やしていくことが大切ですが、災害に対する備えは1回やれば終わりというものではありません。これからも防災を「楽しく」学び続けていってほしいと思います。



【参加者の声】（抜粋）

- ・テント設営楽しかったです。難しそうだったけど、やってみたら意外と簡単だった。
- ・最初は難しかったけれど、体験を通して学ぶことができた。
- ・楽しく講座を受けることができありがとうございました。自分でできることを実践したいと思います。
- ・障害のある方が避難所で地域のために役立つよう体験を積み重ねていきたいです。

第1回「ブルーS3」杯 ボッチャ交流大会 実施レポート

日時：令和2年12月6日（日） 9時～12時40分
 会場：秋田県生涯学習センター 障害者スポーツスペース

参加者：42名

共生社会の実現に向け、「障害者の生涯学習」の充実のためにさまざまな取組をしている秋田県生涯学習センターの学習活動の趣旨に賛同し、県内企業10社が「ブルーS3(ブルースルー)」という団体を設立しました。その協力を得て、ボッチャ交流大会を開催しました。

【開会式】

秋田県生涯学習センターの中2階にある障害者スポーツスペースの利用者を中心に参加者を募ったところ、次の6チームが参加してくれました。

- ①「ボッチャ協会」～当センター主催の講座への協力者
- ②「ハッピー」～秋田大学附属特別支援学校中学部チーム
- ③「一羊会」～おいしいパンを販売している社会福祉法人
- ④「シクラメン」～当センター主催の講座への協力者
- ⑤「Nexus」～秋田大学附属特別支援学校OBチーム
- ⑥「Fire throw」～若年層のボッチャクラブチーム

鈴木所長のあいさつに続き、協賛団体からの賞品紹介、ルール説明をしました。今大会は、2つのグループに分かれてリーグ戦を行い、その順位に応じて順位決定戦を行うこと、1試合4エンドで座位も立位も関係なく試合を実施することを確認しました。3階に控え所を設置し、試合の様子はZoomを使って生中継することも連絡しました。



【試合開始！熱戦に次ぐ熱戦】

早速試合が開始されました。どんどん試合が進んでいくと思われましたが、スーパーショットの連発で、どよめきが起こったり、メジャーが必要なほどきわどい勝負になったりするなど、熱戦に次ぐ熱戦で、予定よりも大幅に時間がかかりました。控え所ではその熱戦を生中継で見ることができるので、次の試合への移行はスムーズに行われました。

リーグ戦後の順位決定戦はさらに熾烈な争いになりました。特に1・2位決定戦の「ボッチャ協会」対「Fire throw」は手に汗を握る大接戦になりましたが、「Fire throw」が勝利を収めました。



【閉会式】

結果は右の対戦表のとおりです。結果発表に続き、優勝チーム、準優勝チームにはトロフィーと賞品が授与されました。3～6位のチームにも賞品が贈られました。

【おわりに】

参加チームへのトロフィー、賞品、手指消毒用のディスペンサーなど、協賛団体の皆様のおかげで充実した大会となりました。ご協力いただき本当にありがとうございました。

この大会は交流が目的であります。今大会は初めてということもあり、当センターに関わりのある方々にお声がけしました。6チームが参加し、3試合ずつ実施することができましたが、予定したよりも時間がかかりました。参加できるチームを増やしながらも充実した大会になるような工夫を考え、第2回も企画したいと思います。

第1回ブルーS3杯ボッチャ交流大会 R2.12.6

A		ボッチャ協会	ハッピー	一羊会	勝数	得点	試合	順位
ボッチャ協会		○	○	○	2-0	15	4	1
ハッピー		X	○	○	0-2	4	12	3
一羊会		X	○	○	1-1	6	9	2

B		シクラメン	Nexus	Fire Throw	勝数	得点	試合	順位
シクラメン		○	X	○	1-1	6	13	2
Nexus		X	○	X	0-2	2	11	3
Fire Throw		○	○	○	2-0	17	1	優勝

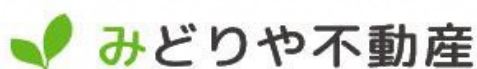
試合順

予選リーグ	1	ボッチャ協会 7 vs 1	ハッピー
	2	シクラメン 6 vs 1	Nexus
	3	ハッピー 3 vs 3	一羊会
順位決定戦	4	Nexus 1 vs 5	Fire Throw
	5	一羊会 3 vs 6	ボッチャ協会
	6	Fire Throw 2 vs 0	シクラメン
	7	ハッピー 1 vs 19	Fire Throw

第1回「ブルーS3（ブルースリー）」杯 ボッチャ交流大会

<協賛企業>

団体名：ブルーS3（ブルースリー）



研究を振り返って

本調査研究では、共生社会の実現という大きな一歩のために、障害のある方やその家族、身近な方々との日々の交流を通して得た情報を生かしたいと考えております。共生社会の実現は、永遠の課題かと思われませんが、漸進的にでも小さな一歩として貢献することが当センターの役割であると思います。

今年度は、特別支援学校、就業・生活支援センター等のヒアリングを実施して、その声に傾聴し、資料にも掲載させていただきました。この場をお借りして、貴重なご意見・ご感想等の提供にご協力いただいた皆様に深く感謝いたします。ありがとうございました。そして、来年度は障害のある方ご本人へのヒアリングを実施したいと考えておりますので、この後もご協力をよろしくお願いいたします。

さて、今年度開所 40 周年を迎えた当センターが、障害者に関係する取組や活動、交流をなぜするに至ったかと言いますと、センター運営の3機能(シンクタンク、研修、学習機会)の有機的な連携を目指す中で、当事者として経験・実践する重要性を認識することができ、それが不可欠なものと判断したからです。そして、調査研究だけでなく、次のような実践を通じながら、「障害者の生涯学習」について理解や体験、交流等を深めてまいりました。

- ・ボッチャお披露目会
- ・ブルー S 3 (協賛企業 10 社) の支援及びブルー S 3 杯ボッチャ交流大会
- ・障害者×防災 (あきたスマートカレッジ K 講座)
- ・市町村等職員専門研修① (車椅子で街歩き)・秋大附属特別支援学校展示
- ・市町村等職員専門研修② (兼) 公民館等職員専門研修② (障害者×防災)
- ・からくりカフェ (北秋田市・「ささえ」) への参画
- ・稲川支援学校青年学級 in TABIJI におけるボッチャ指導・交流
- ・家庭教育支援指導者等研修「特別支援教育の視点から考える家庭教育支援」
- ・障害者スポーツスペースの活用によるボッチャ、卓球バレー、バドミントン
- ・特別支援学校との連携による各種事業の企画・運営
- ・社会福祉法人経営の食パン店の出前販売 等

また、先月上旬に第3回調査研究委員会を開催し、そこで各委員のご意見やご感想から次の課題が見えてきました。

- ・地域別の障害者の生涯学習に対する意識・態度の格差
- ・学校から卒業するまでに趣味や余暇の過ごし方、人生の楽しみ方を味わわせる体験と人脈の構築に重点を置くカリキュラムの作成
- ・学校卒業後の家庭以外の居場所の作り方
- ・生涯学習に関する情報の有機的な活用方法
- ・家庭・職場以外の居場所までの移動方法
- ・調査データの分析における根拠の重要性
- ・調査データから相関性を見出し、様々なスタイルやパターンを読み取る工夫

これらの解決には、即効性のあるものは何一つなく、今後取り組むべき宿題として常に問題意識をもって少しずつ現状の改善を図ることが必要だと思えます。

翻って、昭和 54 年に出版された『秋田の生涯教育』(小畑勇二郎著)には、東北大学教授塚本哲人氏の「人生を見通した学校は、どうあればよいのか。」「最後に、生涯教育センター(現生涯学習センター)。どこが他の施設と違うかが見物ですが、調査研究、情報の収集提供機能を中心に据えたいですね。学校教育をも含まなければ意味がないこともつけ加えましょう。」という記述があります。私たちは、「障害者の生涯学習」を取り巻く課題に対して、不易流行の精神をもって挑み続けてまいりたいと思えます。

最後に、同著より小畑氏の言葉をお借りして、結びとします。

「心の豊かな人とは、人生への充実感を持った人ではなかろうかと、私は思う。本当に満足できる何かを求めて生きている人の心は豊かである。」

本調査研究が障害のある方の心を豊かにする契機となれば幸いです。

令和 3 年 3 月

秋田県生涯学習センター
副所長 倉田 寛行

調査研究事業テーマ一覧

年 度	テ ー マ
昭和55年度	「生涯教育に関する県民の意識と活動の実態調査」(1回目)
昭和56年度	I 「学習相談システム開発に関する実証的研究」 II 「企業における教育・訓練等の実態調査」 III 「学社連携による教育活動調査研究」 IV 「視聴覚教材を利用した学習方法の開発・普及を図るための研究」
昭和57年度	I 「幼児教育充実についての調査研究」 II 「学校教育と社会教育の連携のあり方についての調査研究」 III 「生涯教育関連団体の連携による地域学習の推進についての調査研究」 IV 「学習情報ネットワークの確立を目指した情報提供システムの整備に関する研究」 V 「企業に働く人々の生涯学習に関する調査」 VI 「『教育人材銀行』の在り方についての調査研究」
昭和58年度	「高齢化社会における成人の学習環境整備に関する調査研究」
昭和59年度	「生涯教育関連施設・設備に関する調査」
昭和60年度	「青年の意識と行動に関する調査」
昭和61年度	「家庭教育に関する親の意識調査」
昭和62年度	「家庭・学校・地域の連携に関する調査」
昭和63年度	「生涯学習に関する県民の意識と活動の実態調査」(2回目)
平成元年度	「働く婦人の生活と学習意識調査」
平成2年度	「市町村における生涯学習に関する事業の実態調査」
平成3年度	「生涯学習情報提供に関する調査研究」
平成4年度	I 「地域づくりのための学習プログラムに関する調査研究」 II 「生涯学習情報提供システム構築に関する調査研究」
平成5年度	「市町村における生涯学習を進めている団体、グループ・サークルに関する調査」
平成6年度	「地域における生涯大学システムに関する研究開発」(1年次)
平成7年度	I 「学校・教職員の生涯学習についての調査研究」 II 「地域における生涯大学システムに関する研究開発」(2年次) 学習意識調査部会「生涯学習に関する県民の意識と活動の実態調査」(3回目)
平成8年度	I 「秋田県生涯学習奨励員活動に関する調査研究」 II 「地域における生涯大学システムに関する研究開発」(3年次)
平成9年度	「体系的で総合的な県民学習システムのあり方に関する調査研究」
平成10年度	「子どもの生きる力を育むための家庭教育と地域の支援体制に関する調査研究」
平成11年度	「子どもの生きる力を育む地域活動に関する調査研究 ～地域行事・地域活動への児童生徒・保護者の関わり方に関する実態調査～」
平成12年度	「学習者の学習活動および社会参加活動に関する調査研究 ～主として、『あきた県民カレッジ』講座受講者を対象として～」
平成13年度	「県民の社会参加活動の活性化を図る学習プログラム開発に関する調査研究」
平成14年度	「生涯学習に関する県民の意識と活動の実態調査」(4回目)
平成15年度	「大学等高等教育機関との連携協力による、現代的課題に対応した学習プログラム開発に関する研究」
平成16年度	「今後における秋田県生涯学習センターのあり方に関する調査研究」(1年次)
平成17年度	「今後における秋田県生涯学習センターのあり方に関する調査研究」(2年次)
平成18年度	「秋田県における新しいあきた県民カレッジの在り方に関する調査研究」
平成19年度	「生涯学習ボランティアの在り方に関する調査研究 ～住民主体による生涯学習社会を目指して～」(1年次)
平成20年度	「生涯学習ボランティアの在り方に関する調査研究 ～住民主体による生涯学習社会を目指して～」(2年次)
平成21年度	「地域ボランティア活動支援センターの在り方に関する調査研究」
平成22年度	「秋田県社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」 (文部科学省との委託共同研究)
平成23年度	「チョコボラ・プロジェクト～『公民館』の活性化による知の循環型社会の構築～」
平成24年度	「地域の教育力を活用した公民館運営とその在り方に関する調査研究 ～知と行動が結びついたクリエイティブな循環型社会の構築を目指して～」
平成25年度	「知と行動が結びついた循環型社会構築に向けた公民館事業及び運営の在り方に関する調査研究」(1年次) (文部科学省委託事業「公民館等を中心とした社会教育活性化支援プログラム」)
平成26年度	「知と行動が結びついた循環型社会構築に向けた公民館事業及び運営の在り方に関する調査研究」(2年次) (文部科学省委託事業「公民館等を中心とした社会教育活性化支援プログラム」)
平成27年度	「知と行動が結びついた循環型社会構築に向けた公民館事業及び運営の在り方に関する調査研究」(3年次)
平成28年度	「連携・協働による地域活性化事例に関する調査研究」(1年次)
平成29年度	「連携・協働による地域活性化事例に関する調査研究」(2年次)
平成30年度	「連携・協働による地域活性化事例に関する調査研究」(3年次)
令和元年度	「障害者の生涯学習」に関するニーズ調査(概要版)
令和2年度	「障害者の生涯学習」に関するニーズ調査～特別支援学校生徒の保護者アンケート結果による一考察～

調査研究委員

委員長	鈴木 修一	県生涯学習センター所長
副委員長	原 義彦	秋田大学大学院教育学研究科教授
委員	成田 友加子	北秋田市障害者生活支援センターささえ相談支援専門員
委員	吉田 かおり	前秋田県特別支援学校PTA連合会会長
委員	佐々木 朋広	県教育庁特別支援教育課主任指導主事
委員	小川 成樹	県教育庁生涯学習課社会教育主事

事務局

事務局長	倉田 寛行	県生涯学習センター副所長
事務局員	皆川 雅仁	県生涯学習センター主幹（兼）学習事業班長
事務局員	菅原 大志	県生涯学習センター副主幹（兼）総務班長
事務局員	柏木 睦	県生涯学習センター主任社会教育主事
事務局員	長谷川 工	県生涯学習センター主任社会教育主事
事務局員	菊地 智	県生涯学習センター社会教育主事
事務局員	進藤 尊信	県生涯学習センター社会教育主事
事務局員	佐藤 真	県生涯学習センター社会教育主事
事務局員	羽川 尚	県生涯学習センター社会教育主事補
事務局員	栗田 寿	県生涯学習センター社会教育主事補
事務局員	加賀谷 宗篤	県生涯学習センター社会教育アドバイザー
事務局員	渡部 猛	県生涯学習センター研修員
事務局員	鈴木 希子	県生涯学習センター事務補助員

令和2年度

「障害者の生涯学習」に関するニーズ調査
～特別支援学校生徒の保護者アンケート結果による一考察～

調査研究報告書

編集・発行 秋田県生涯学習センター
〒010-0955 秋田県秋田市山王中島町1-1
TEL 018-865-1171 FAX 018-824-1799
E-mail sgcen002@mail2.pref.akita.jp
<https://www.pref.akita.lg.jp/lifelong/>



発行日 令和3年3月15日